



性春のイタズラ
～性裁～

望月 七海

(1)

「それでは～男子に引き続き、次は女子の自己紹介に移りたいと思いま～す」

澆刺としたその掛け声にこれまで終始、下を俯いていた男子が急にざわめき出した。その一方、一年の女子は天国から奈落の底へと、一気に突き落とされたような気分だったに違いない…

「ほら、グズグズしてないで一年の女子もそこに並びなさいよ」

アイリは有無を言わず、男子と相対するよう横一列に並ばせた。そして、ここからは奇しくも、一年の女子による自己紹介が始まったのである。

「まずは…茜、アンタからだよ」

「エッ…そ、そんな…私からって…」

真っ先に名前を挙げられた茜はこの時点ですでに、今にも泣き出しそうな顔になっていた。

「そんな顔したってダメだって…ここにいる一年の中でアンタのタイムが一番悪かったんだから…」

「…」

こういった名目を挙げられては、言い返すこともできやしない…こうして名前の後に胸の大きさとブラのカップを自己申告するよう一番最初に言い付けられる。茜は恥ずかしそうに…

「…茜です…は、82センチのCカップです」

と、正直にその控え目なバストサイズを報告した。もちろん、茜もここで見栄を張るような馬鹿な真似はしないだろう…この後に待ち受ける長い質問責めが終わった暁には、当然ソレをここにいる男子を含めた全員の前で披露して魅せなければイケないのだから…

(なっ、なあ…82だってよ)

(Cカップって…茜のアレって、そのくらいのもんなのか?)

男たちは茜本人の口からそのことを聞いただけで、十分興奮させられていた。この後、披露されるであろうその手頃なサイズのオッパイを頭の中に思い描き、妄想と股間を次第に膨らませていく。

「ねえ、茜ってここにいる男子の中で誰のことが一番好きなの〜？」

男子の時と同じように女子にも上級生からのキツイ質問責めが待っていた。当然、茜も…

「…す、鈴木のことか…」

と、その好きな男子の名前を強制的に自白させられる。

「へえ〜、やっぱ鈴木って人気あるんだあ〜」

「でも、ほら…鈴木って見ての通りかなり小さくて包茎だっていうのに、ソレは気になんないの〜？」

半分皮の被った状態の鈴木の一チモツを指差し、アイリが確認を取る。茜は見て見ない振りをしながら

「…は、はい…ソコは別に…」

と、何処か少し妥協したかのような感じに掠れた声を漏らした。

「フフツ…鈴木、よかったじゃ～ん。茜はアンタがそんなだけ小さくて包茎でも、全然気にしないんだって～」

「…」

こう言って慰められたって本人は当然腑に落ちないだろう…

「エー、それってホントなの～？…そんなこと言うんだったら、茜にその鈴木のチンコにこびり付いてるチンカスを綺麗にしてもらってというのは？」

「エッ！…そ、それは…」

思いもしない提案に、茜は慌てふためき、押し黙った。

(…き、綺麗にするってというのは、まさか…)

振られたとんでもない内容に鈴木の方もどうしていいか解らず、困惑している。

(…イツ、イヤツ…ちよつ、ちよつと待ってくれ！…今、そんなことされたら…)

もしこの状況で、カリーに茜がほんの少しでも触れてきたのなら…鈴木はとんでもないことが起こってしまいそうで気が気でいられなかった…

「どうしたの？包茎でもイイとか言ったくせにできないとか言うつもり～？」

二、三年の女子が可笑しそうに固まった二人のことを囁し立てる。

「でもさあ、そんなことされたら鈴木の方がヤバいことになるんじゃない？今、茜にちょっとでもチンコ弄られたら、こうやってガマン汁がタラタラ滲み出してくるだけじゃ済まないかもよ～」

「ププッ、エー！何～？それって、もしかして…ガマン汁じゃない違う本イキの白いのまで飛び出てきちゃうってこと～？」

「キャハハッ！マジで一！でも、それならソレでちょっと見てみたいかも～」

「…」

こんな下品な会話の間も、茜は鈴木の方を全く見ることができず、終始し下を俯いていた。

「ねえ、茜～出来ないの～？」

その催促にも茜は全く動こうとはしない…

「フンッ、もういいわ…これ以上待つたって、時間の無駄になるだし…それに、ホントにここで鈴木に白いのまで出されたりなんかしたら、その後始末が面倒クサいだけだから」

「まあ、それもそうだね～」

アイリのその冷静かつ賢明な判断に鈴木はホッと胸を撫で下ろした。

「ねえ、それより茜って処女なんだよねえ？」

茜の反応を見ていれば、それはすぐにわかるのだろう…

「…は、はい…」

「…ってことは、こうやって男のチンコをナマで見たのも初めてってこと？」

「…は、初めてです」

「へえー、そうなんだあ…だったら、そうやって遠慮しないで、折角なんだから、もっと近寄ってよく見せてもらえばいいじゃ〜ん」

ポンツと後ろから背中を強く押され、茜と鈴木のイチモツの距離が急接近した。

「…キャッ！…イツ、イヤッ！」

そのナマコのような男ならではの不気味な物体に、茜が思わず拒絶の反応を示す。

「ちょっと〜何そんなカマトト振った胡散臭い真似してんのよ〜茜だってホントは興味あるんでしょ？…ホラ、どう？こうやって初めて間近で見た大好きな鈴木のナマチンコっていうのは？」

茜がわずかに顔を上げ、鈴木 of イチモツをチラ見した。

「…そ、それは…」

茜の目に映った鈴木 of そのモノは恥ずかしそうに頭を隠している。

「やっぱさすがに、こんな糞虫みたいな包茎チンコだとは思わないよねえ〜」

「…」

当然、好みの男のモノが短小で包茎だなんて思うはずがない。

「黙ってないで何とか言いなさいよ…茜だって、鈴木のことを好きだって言うなら、一度や二度くらいチンコの大きさを想像したことだってあるんでしょ？」

相手のことが好きだっていうなら、別に想像したっておかしくはないだろう…茜もこの場の異様な雰囲気
に流されるように

「…あ、ありますけど…」

…と、思わず口を滑らせた。

「だよねえ～…ってことはその後、鈴木とのコトをアレコレいろいろ想像して茜も自分でしちゃってるよねえ？」

「なっ！…そ、それって…」

驚きの表情を魅せる茜に対し、アイリがニヤリとシタリ顔を魅せる。それは巧みな誘導尋問だった…

「茜～隠してないで、正直に白状しなって…アンタも鈴木とのエッチなんかを妄想したりして、独りでシテるんでしょ？」

それはまるでハナっから決めつけたような言い方である。

「…」

「ちょっと～どうなの～？茜だって、イヤらしい気分になった時だとか、生理前のムラムラした時なんかには、隠れて普通にオナッてんでしょ～」

同性からの言い逃れの出来ない尋問に茜はタジタジだった…全てを見透かすような周りの女子の鋭い視線にウソなど全く通用しないだろう…

「…そ、それは…た、たまに…シタことはありますけど…」

(なっ！マッ、マジかよ！)

「ほらねえ～…普段は何も知らないような初心な顔してるくせに、結局茜も普通にオナってんだよねえ～」

(…そ、そんな強調したように大声で言わなかったって…)

オナニーしていることがここにいる男子全員にバレ、茜の顔は真っ赤だった…

(…ま、まさか…あ、茜もオナニーしてるだなんて…)

周りにおおっぴろげに言わないだけで女だって実は男と同じように、ほとんどがシテるということなのだろう…男たちの脳裏には、茜がオナニーに興じ、喘いでいる姿がぼんやりと浮かび上がろうとしていた。

「じゃあ、茜はいつもどんな感じでオナってんの？…もりかして、オモチャとか使ったりしてるの～？それともやっぱ自分の指だけで弄ってるってこと？」

男子が想像しやすいようしているのか、上級生の女子が茜のオナニーについて深く掘り下げる。茜はさらに顔を茹でダコのように真っ赤にしながら

「…ゆ、指だけで…」

と、そのいたってノーマルなオナニー方法を正直に暴露した。

(…ゆ、指でって…あの人差し指だとか、中指なんかで…アソコのところを…)

男子の視線が茜の細長い指先に釘付けとなる。

「ふ～ん…じゃあ、ローターだとかバイブなんかは使ったことないの？」

「…そ、そんなの…一度も使ったことはありません」

「ふ～ん、そうなんだあ…なら、茜ってまだあのローターの凄さを知らないんだあ～」

上級生の女子たちがニヤリと意味深な妖しい笑みを浮かべている。

「…でも、そんな自分の指なんかだけで、ちゃんと最期までイクツていうの～？」

(…イツ、イクツて…)

女子の口から発せられた『イク』という直接的な言葉を耳にし、男子は平常心ではいられなかった…

「…そ、それは…まあ…普通には…」

「ププツ…アンタ普通って、どういうことよ～」

「だったら、茜が指でどうやってしたら、『イクツ』って言うのか、男子のみんなに詳しく教えてあげなよ～」

「…ど、どうやってって…」

しつこいまでの追求に、茜はまたもや言葉を詰まらせた。

「茜が普段いつもヤッてる有りの儘のオナリ方をイッてくれればいいんだって」

(…そ、そんな…オナリ方だなんて…)

「ほら、どうしたの？茜は指でどんなことしてたら、『イツちゃう～』って言うの～？」

男子が茜のその答えを聞き逃さないよう声を潜め、必死で耳を傾けている。

「…ソ、ソレは…ゆ、指で…いろいろと…い、弄ったりとかしてたら…だんだんと身体が熱くなってきて…それで…そのうちに…ア、アソコが…」

「ちょっと！いろいろとか、アソコって、一体何なのよ！そんな曖昧言い方じゃ、まるっきり解んないじゃない！弄ったりって、何処を弄るって言うのよ？男子にもちゃんと解るようにはっきり言いなさいよ！」

そのアイリの怒号が、茜の重い口を滑らせた。

「…あ、あの…クツ、クリトリスなんかを…」

(なっ！…今、茜が…)

茜の口から飛び出したクリトリスという卑猥な単語に男子は驚きと昂奮を隠せなかった…

「へえ～…ってことは、やっぱ茜もクリちゃんが一番感じるってことなんだあ～」

「…は、はい…」

「そりゃ、最初は誰だってクリからでしょ」

「だよねえ～ローターなんか当てたりしたら、ソッコーだもんねえ～」

経験者は雄弁に語る。

「でも、それだけ～？当然、クリだけじゃモノ足りなくなってくるよねえ～」

同じ女同士。そのイヤらしい行為に及ぶ際、この後どんな衝動に掻き立てられるは皆、解り切っている。

「女がオナニーしてイクっていうのに、ずっとクリだけを弄ってたって、スツキリ満足できる訳ないじゃ～ん…アンタだけじゃなくて、ここにいる他の女子だって全員、普通にヤッてることなんだから、茜もちゃんと全部最期まで言いなあって…他にはどんなことをするの～？」

もう洗いざらい全て吐いてしまう以外、逃れる道は残されていなかった…

「…あ、あとは…ゆ、指を…アソコの中に挿れたりとかして…」

「ちょっと～茜、また主語がないじゃな～い…指をアソコに挿れるって、一体何処の中に挿れるっていうのよ～」

茜の口からどうしてもその卑猥な言葉を言わせたいのだろう…茜もついに観念したかのように…

「…あ、あの…オ、オマンコの中に…」

と、その決してイッてはならない放送禁止用語を口にしたのだった…

(オ、オイッ！…き、聞いたか？茜が…今…オ、オマンコって…)

茜の口から発せられたその4文字の隠語に、男子の方からは大きなどよめきが巻き起こる。

「フフッ、そうよ。茜だってちゃんと解ってるんだから、そうやって『オ・マ・ン・コ』って言葉にしてはっきり言ってくれないと〜」

「やっぱ処女っていても、オマンコの中に男のチンコを挿れられる時のこと想像して、指とか他にもいろいろと挿れてみたくなっちゃちゃうもんねえ〜」

それは女として生を受けた以上、どうすることもできない性なのだろう…茜がオマンコに指を突っ込み、オナニーに没頭している姿を想像すると男たちはいても勃っても居られなかった。

「茜だって、まだ隠してるだけでホントは、指以外に何か他のモノも挿れたりしながら、結構がっつりオナってんじゃないの〜？」

「…そ、そんなこと絶対してません…」

「ふ〜ん、そうなんだあ…ほら〜、ここなんかにも普通に置いてあるこの8×4のスプレー缶なんて、一番手頃で、みんな意外にお世話になってたりするんだけどねえ〜」

「そうそう…コレって、試しに挿れてみたくなっちゃう丁度いいサイズ感なんだよねえ〜」

(…じよ、女子っていうのは…ホントに、こんな物をアソコに挿れて…)

初めて知る女子のその赤裸々なオナニー事情に、男子たちの昂奮は留まる所を知らなかった…

「…じゃあ、イイ感じに盛り上がって来たことだし、そろそろその茜のも魅せてもらおつか〜」

茜への質問責めがようやく一段落したところで、アイリからついにあの宣告が突きつけられる。

「茜、上を脱いでブラを外して魅せてみなよ」

「…」

解っていたことだが、やはり茜にも男子と同様の命令が下された。ここに関して男女差別と言うものは一切ない。男子はその命令に誰一人背くことなくイチモツを曝け出し、茜自身もそれを見て少なからず愉しんでいる部分があったのである。後ろめたさもあり、茜も逆らうことはできなかった…

「…わ、わかりました…」

アイリの至上命令に従い、茜が着ている服を一枚ずつ脱いでいく。上着に隠れていた茜の柔肌が徐々に露わになってくると…

(オッ、オイッ！…アレ見てみるよ)

そこからチラリと白い色が垣間見えた瞬間、男子の目の色が変わる。小ぶりの二つの膨らみが、純白のブラジャーにスッポリと包み込まれていた。男子の胸の鼓動は、これから披露される同年代の女子のナマのオッパイにバクバクと激しく高鳴っている。

(…こ、この白いブラジャーの中に…茜の…)

…と、茜の手がスッと後ろに回った。男子がゴクリと生唾を呑み込む。茜はすでに覚悟を決めていたのか、佐藤のようにモジモジすることなくホックを外し、そしてあっさりとブラを脱ぎ捨てて魅せたのだった。目の前の視界から真白な幕だけがハラリと下に舞い落ちていく。



「うおっ〜！」

そこからお目見えした鮮やかな二輪の桜色に男子から抑えきれない感嘆の声が漏れた。

(スゲー…コ、コレが…茜の…)

(あつ、ああ…あ、茜の…オッパイっていうのは、こんなふう…)

目を丸くする男たち。その桜色のリングの真ん中には、茜の性格を表すかのような小指の爪程の可愛らしい突起物がチョココンと慎ましやかに佇んでいた。目の前に姿を現した茜のあどけないオッパイに男子がいつそう騒がしくなる…しかし、それとは反対にアイリや他の周りの女子の反応は悪かった。女同士だからなのだろう…見慣れた同姓の胸には、さほど興味がないのかもしれない。

「へえ～、思ってたよりおっきいじゃ～ん」

「でも、やっぱ処女っていうだけあって、まだ子供っぽくな～い？」

「別に色とか乳輪の大きさなんか普通サイズだし～」

披露された茜の胸はどこにでもよく見ることのあるこれといった特徴のないオッパイなのだろうか？自分たちの身体に付いているモノとの違いを見比べ、二言、三言だけ簡単に感想を述べると…

「よし、じゃあ次は…美咲！アンタの番だよ」

(エッ?)

アイリのその言葉に一年は全員首を横に傾げたことだろう…

(…つ、次って…どういうことだよ！)

(こ、これだけ？…茜は?)

男子は皆、心の中で大声で叫んでいた。それもそのはずである。これでは全く割に合わないと思うことだろう。こっちは最も恥ずべき局部を余す所なく、剥き出しで曝け出しているのに対し、茜は上半身を魅せただけに、過ぎないのだから…

(2)

(…ど、どういうことだよ！…コレって、女子は上だけでイイってことなのかよ…)

期待を半分裏切られ、男子の表情には大きな憤りと落胆の色が見られる。また、茜本人も驚いていた。下半身まで全て見られることを覚悟していただけに、これだけで終われるとは思ってもみなかったのである。茜は一安心し、ホッと胸を撫で下ろした。後ろで控えている他の女子たちにも少し安堵の表情が伺える。それとは反対に、男子は目で激しく訴えかけていた。

(…ふ、ふざけんなよ！こんなのどう考えたって、不公平だろ！)

「何よ、その顔は！何か文句があるなら、はっきり口に出しなさいよ！」

「…い、いえ…そんな…別に何も…」

アイリが男たちの不満を一蹴する。当然、先に進行しようとするアイリに対し、文句言える男は誰一人としていやしない。こうして茜の出番は男たちの志半ばにして終了し、次に控えている女子の自己紹介が始まったのだった…

「…み、美咲です…85のDカップです」

茜の後ろから一回り大きな女子が前へと押し出され、俯きがちに自己申告する。

「へえー、美咲のソレってDなんだあ～…何か服の上から見た感じだと、もっとEくらいイッてるのかと思ってたんだけど～」

「でも、一年の時からDもあるなんて、これからドンドンデカくなってくんじゃない？」

その本人の申告通り美咲の胸は、まだ一年とは思えない程ふくよかだった。それは現状の制服の上からでも十分伺い知ることができている。

(なあ…Dだってよ)

(…Dってことは、やっぱ美咲のは茜のオッパイよりも一ランク上ってことでイイんだよなあ?)

(そりゃあ、どう見たってあのデカさは、茜のアレなんかとは比べ物になんねえだろ…)

「…」

この後、その美咲のボリュームのあるたわわな胸を拝めるのかと思うと男たちは早くもソワソワと浮き足立っていた。げんきんなものである。この時点ですでに、つい先程までの茜の下半身への執着心は男子の頭の中から何処か遠く彼方へと忘れ去られているのだから…

「あっ…そういえば、さっき聞き忘れてたんだけど、美咲は処女ってことでイイんだよねえ？」

その半信半疑な質問に対し、

「…イ、イエ…それは…」

…と、蚊の鳴くようなか細い声で美咲が異を唱えた。

(エッ?い、今…美咲の奴…イエって、言ったような?)

はっきりとしない真相をアイリがもう一度問い質す。

「ねえ、よく聞こえなかったんだけど…まさか、美咲って処女じゃないってことなの？」

「…ハ、ハイ…そ、そうじゃ…ありません…」

な、なんと美咲は処女ではなかったのだ…

「エッ！ そうなの？」

「ウソー！ ホントに～？」

周りから次々と驚きの声が聞こえてくる。

「へえ～…普段は大人しそうな顔してるくせに、美咲もヤルことだけは、ちゃっかりヤツちやっってたんだあ～」

「美咲の雰囲気だと、絶対にバージンだって思ってたのに、もう男とすっかりセックス済みだったんだねえ～」

(…そ、そんな聞こえるような大きな声で言い触らさなくたって…)

「ねえ～鈴木も今、ちゃんと聞いてたよねえ？美咲って、もう処女じゃないんだって～」

「…ウツ、ウソだろ…み、美咲…お前ってホントに…」

「ププツ…あ～あ、残念だったねえ～…すでに誰だか知らない他の男のチンコをズッポリとオマンコに啜え込んでましたあ～」

「…」

美咲は鈴木の顔を一切見ることができず、ただただ顔を下に背けていた。

(…マ、マジかよ！)

(美咲って…男とセックスしたことがあるっていうのかよ)

一見、控え目で清純そうな美咲が処女ではないという衝撃の事実を知り、男子たちはますます感情を昂らせた。

「でも、逆にそっちの方が良かったんじゃない？鈴木は童貞な訳だし、これからいよいよエッチするってなった時には、美咲に手取り足取りリードしてもらえるってことじゃ〜ん」

「やっぱお互い初めて同士だと、緊張してチンコが勃たなかったりとか、挿れるオマンコの穴の場所が解んなかったりだとかいろいろと面倒くさいことが多いもんねえ〜」

「ねえねえ、それって最近の話？美咲はいつその男とハメちゃったの〜？」

処女でないということが発覚し、美咲への質問がこれまで以上に露骨なものとなっていく。

「…中二の夏休みの時に…」

「エー！それって、かなり早くな〜い？」

「美咲のその初エッチの相手っていうのは、一体どんな男だったの？」

「…部活の1コ上の先輩なんですけど…」

「へえ～！そっか～…でもまあ、それもよくあるパターンの奴か～」

「先輩とは、どういう関係だったの？…付き合ってたってこと？」

「…ハイ…でも、先輩が卒業するまでだったんで…だいたい一年くらいのことなんですけど…」

「じゃあ、もしかして…その相手の先輩っていうのも、童貞だったの？」

「…別に聞いたりとかしなかったんで、はっきり解らないんですけど…まだ全然慣れてない感じだったんでたぶん、そうだったんだと…」

「だったら、やっぱ初めて挿れられる時っていうのは、かなり痛かったんじゃない？」

「ハイ…モノ凄く痛かったってことだけは、ハッキリと…」

「まあ、相手が童貞だったっていうなら、余計にそうかもねえ」

処女の茜の時とは違い、男の性を知っている美咲に対しては皆、興味があるのだろう…より突っ込んだ質問が問い掛けられる。

「でもじゃあ、初エッチしてから少なくとも半年くらいは付き合ってた訳だし…その先輩ともたった一回や二回ってだけじゃ絶対に済まないよねえ？」

「…そ、それは…」

「ププツ…アンタ何、しらばっくれてやり過ぎそうとしてんのよ～…相手のことが好きで付き合ってたんなら、何回もやりまくったんでしょ～？」

「…な、何回もって…そんなには…」

「何よ～じゃあ、ただ処女を奪われたってだけで、全然エッチしなかったとでもいうつもりなの～？」

「…イ、イエ…そ、それなりには…」

「ほら～、やっぱシテンじゃ～ん」

「それなりってことは、ある程度やり慣れて、今は全然平気なんだよねえ？…男にチンコ挿れてもらう時に、ちゃんと気持ちイイって感じてんでしょ～？」

「…ハ、ハイ…ソコは、もう普通に…」

「そりゃそうだよね～何回か経験シテくると、オマンコにチンコ挿れられるのって、最初の時のあんなに痛かったのがウソだったみたいに、チョー気持ちイイもんねえ～」

(…や、やっぱり…セックスっていうのは、そんなに…)

(…ってことは、美咲っていうのは、今までにもう相当な回数…)

「ねえ…じゃあ、美咲はどんな体位が一番好きなの？」

まるで美咲がセックスしているところを想像させるようなナマナマしい質問に、男子は女子以上に興味津々だった。

「…せ、正常位が…」

美咲の口から聞いたのは最も無難な答えである。美咲のその答えが本心かどうかは定かではないが…

「他には～？もっといろいろシテんでしょ～？」

当然、正常位というだけで収まるはずがないだろう…誰だってヤリ初めの頃は、どれが一番気持ちいいだとか興味本位でいろいろと試してみたくなるものである。

「…他には…バックなんかも…」

(バック！バックって…美咲が、そんなことを…)

「ア～、バックもイイよね～…私もどっちかっていったら、ソッチの方が好きかも～」

「バックって、エロくみえるもんねえ～」

「そうそう～後ろからガンガン激しく突かれるのって、何か動物的っていうか、男に責められてるって感じがして、受け挿れる女側の身としては凄い昂奮して濡れてきちゃうじゃ～ん」

「…っていうか、それってただ単に、アンタがMだからってことでしょ～」

美咲が四つん這いの格好になり、後ろから男にズボズボと突かれ、喘いでいるシーンが目の前にぼんやりと浮かんでくる。

「ねえ、それだけ～？まだ、それ以外にだってヤッてるよねえ？もうこの際なんだし、全部正直に吐いて楽になっちゃいなよ～」

このように次から次と連続でぶつけられる女たちの執拗なまでの尋問責めの前に、隠し通せるような自信もない…

「…あ、あとは…タマに…自分が上になってシタことも…」

(…う、上って…てことは…)

「ほら～、やっぱ美咲なんかでも男の上に跨って、自分からガンガン腰振ったりシてるってことなんだよねえ～」

「…ガ、ガンガンって…別にそこまでは…」

「そうやって、恥ずかしがらなくなっただっていいじゃ～ん…上になるってことは、どう考えたって、男より女の方が腰振って主導権を握ることなるんだから…」

「…」

たしかにその通りである。

(…まさか、美咲が…そ、そんなことまで…)

普段、真面目で清楚なイメージの強い美咲が自分から男の上に跨り、腰を振って喘いでいる姿とういのは、想像だけでもかなり衝撃的な映像だった。

「私もバックで突かれるよりかは、騎乗位の方がいいかも～自分が上だと好きなように動けるし、女の方が男を責めてるって感じがするじゃ～ん」

「それはアンタがドSだからだって」

「上からだとなりの気持ち良さそうに喘いでる顔がよく見えるし、ナニより自分が腰振って男を自分より先にイカせるっていうのが、快感なんだよねえ～」

「…でもなんだかんだ言っただって、一番いいのは正常位じゃない？」

「まあ、コッチが最期イク時ってほしい正常位だもんねえ」

「やっぱ彼氏とかに上からガンガン責めてこられて、奥まで激しく突かれちゃうとたまんないじゃ〜ん」

経験豊富なヤリマン女子のセックス談義をすぐ横で聞いているだけで、男子はたまらなかった…

「ねえ、美咲って中イキはしたことあるの？」

(…なっ、中イキっていうのは…)

聞き慣れない女同士ならでは隠語に、男たちは静かに聞き耳を勃てる。

「…イ、イエ…それは、まだ…」

「そっか、やっぱそこまでイクのはまだ無理か〜」

「さすがに中で『イクッ』っていうのになるには、ちょっと気が早いんじゃない？」

男がいとも容易くイッてしまうのとは違い、女が中でイケるようになるには、ある程度の経験と時間がかかるものなのかもしれない…

「じゃあ、そうやってエッチで自分だけが最後までイケなかったりなんかしたら、美咲はどうやって、そのモヤモヤした蟠りを鎮めてんの〜？」

「…ど、どうやってって…」

「そうやって男にだけさっさとイかれて、コッチだけが最期までイケずに悶々としたままでなんて、ヤリ切れなくて、スツキリ寝れなくな〜い？」

「…そ、それは…」

「プッ…アンタ、ここまで来てまだ恥ずかしがってるの？ここにいる他の女子だってみんな普通にシてることなんだからホントのこと言いなっ…美咲だって、そうやって中でイケないっていうんだったら、自分でオナッてクリイキしてんでしょ～？」

(…クッ、クリイキっていうのは…つまりは…ク、クリトリスを弄って…)

「…ハ、ハイ…」

そのコトを美咲が顔を真っ赤にしなが、素直に自認したのだった…

(…ってことは、やっぱり美咲の奴も…)

茜同様、美咲もオナニー常習者ということに違いない…

「美咲だったら、茜なんかと違って経験も豊富そうだし…ローターとかのオモチャも使ったことがあるんじゃないの～？」

「…そ、それは…ちょっとだけ…先輩に…」

「ほら～やっぱそれなりにエッチしてるってだけあって、ローターも普通に経験済みなんだあ～」

「ローターって、かなりヤバイもんねえ～」

「美咲もローターなんかで責められたら、速効でイツちゃうんじゃない？」

「…ハイ…ローターだと、アツという間に…」

このように女子から何気ない感じで発せられる『イク』という僅か2文字の単語が、まるで鋭利な刃物のように男たちの股間を熱く刺激する。

「…っていうか、彼氏なんかにローターでクリ責めとかされてたら、ただ単に『イクッ』って言うだけじゃ済まされなくな〜い？」

「…」

ナニかピンとくることがあったのか、明らかに美咲の顔色に変化が見られた。

「ププツ…ねえ〜どうなの？そうやってローターなんか使ってたったら、潮を吹いたことだってあるんだよねえ〜？」

その鋭い見解に間違いはない…

「…は、はい…」

「フフツ…やっぱ思ったとおり美咲も潮まで吹かされちゃってたんだあ〜」

(…そ、そんな…まさか…し、潮を吹いたことまであるだなんて…)

「美咲って敏感そう見えるし、それこそクジラみたいに結構大量に吹いちゃうんじゃないの〜？」

「…べ、別に…そこまでは…」

美咲はそれほど強く否定するようなことはしなかった…

(…い、今のって…もしかしたら、美咲もよくAV女優なんかスゴイ喘ぎ声を挙げながら、吹いちゃうみたい…)

(あっ、ああ…オマンコをビチョビチョに濡らしながら、とんでもない量の潮を撒き散らしたりとかするんじゃ…)

こんな男子一人一人の昂奮の度合いが、女子からははっきりと手に取るように明確に判別できるのだった。

「ア～…ほらアレ、見てみなよ～…何か佐藤のチンコがまたおっ勃ってきてるんですけど～」

「ププッ、それだったら、アッチも見てみなよ…田中のなんてビンビンになり過ぎて、青筋が浮き勃ってんじゃ～ん」

丸出しのイチモツがピクピクと小刻みな反応を示し、ムクムクと急激に勃起上がっていく過程を面白おかしく囃し勃てる。

「ねえ、アンタたち何もしてないのに何でそんなにチンコをピクピク言わせてんの～？」

「もしかして…美咲がクリイキしたり、潮吹きしたりする時のこと想像させちゃった？」

それは完全なる確信犯である。

「あ～あ…こんだけ勃たせてたら、この辺で一発抜いて出しちゃわないと、いい加減収まりがつかなくなってきたんじゃない？」

「ププッ…たしかにコイツらの今のこのチンコの勃起具合だとか、キンタマのせり上がり具合なんかを見ると、ガマンの限界ってところまで込み上げてきちゃってるって感じだもんねえ～」

「フフツ…だったら、この状態から平常時に戻しなっていうのも酷な話みたいだし、こうなったらもうとことんイキ着くギリギリところまでビンビンに勃たせてあげるわよ」

アイリの顔つきがニヤリと得意げな感じになり、ますますイヤらしさを増してイクのだった…

(3)

「ねえ、美咲～アンタもそれだけ普通にエッチしまくってんだったら、さっき話してた家庭教師の美鈴が田中にシテあげたみたいに…当然、男のチンコを舐めたことだってあるんだよねえ？」

「なっ！」

その質問に対し、男子の目の色があからさまに変わるのがわかった。

(…な、舐めたりってというのは…あ、あの…男のアレを口でスルってという例の…)

それは経験のない童貞の男が、セックスという行為以上に一番興味のあることと言っても過言ではない…

「…」

「ちょっと～何、また黙ってヤリ過ぎそうとしてんのよ～美咲は男のチンコをフェラしたことがあるのかどうかって、聞いてんだけど～」

男子の視線が美咲の次の唇の動きに集中する。

「…あ、ありますけど…」

「…!!」

その答えに対する男たちの反応は殊更大きかった。

(…や、やっぱり美咲のヤツも…)

童貞の男にとって小便をする器官でしかないイチモツを口で啜えるフェラチオという女性の奉仕行為は想像を絶する代物なのだろう…

(…ってことは…み、美咲も…あのアヒルみたいなプルンとしたおちよぼ口で…男のモノを…)

この時、男子たちの脳裏には美咲が男の股間の前にストンと跪き、いきり勃ったイチモツを妖しく見上げ、愛おしそうにパツクリと口奥深くまで頬張り、ジュポジュポとはしたない音を立てながら、ひたむきにフェラチオに励んでいる姿が思い描かれたに違いない。

「アッー！見て見て、ほら～全員チンコがグングン上向きに勃ってイクんだけど～」

まるで透明なテグスで亀頭を吊り上げられたかのように、並んだイチモツが瞬く間に鋭い角度で鎌首をもたげていく。

「ププッ…アンタたち今、美咲がフェラしてるとこ想像したわよねえ～？」

女子がしたり顔で男子に問い詰めた。言い逃れはできない。そのことが隠しようのない事実であることを、己のイチモツが力強くはっきりと示している。

「じゃあ、美咲ってフェラだけで男をイカせたことはあるの～？」

恥じらいとは無縁のアバズレな女たちはそのオスの本能ともいうべき単純明快な反応を面白がり、美咲に更に詳しく追求した。

「…そ、それは…まあ…い、一応は…」

(マッ！マジで言ってんのかよ…)

「へえー、まだ高1になったばかりのヒヨっ娘同然だっていうのに、男の性っていうのをよ〜く知ってんじゃ〜ん」

「そうやってフェラだけで男をイカせるのって、ある程度慣れてからでないとなかなか上手いことイカないし、それに龟头とかカリの部分だけじゃなくて、裏筋の縫い目の処だったりとかちゃんと男の感じるツボを押さえてないとイケないもんねえ」

「そうそう〜一回イカせてコツを掴んじゃうと、次からは案外簡単にイカせられるんだけど、それまでは私も上手くイカせられなかったかも〜」

「…ってことは、美咲もそれだけ何回もチンコを啜えさせられて、フェラの経験を積んできてるってことなんだもんねえ〜」

「…」

その見解に対し、美咲は何も言い返すことができず、黙認する。

(…み、美咲っていうのは…そ、そんなに何度も何度も…)

「じゃあ、当然男が最期イク時にチンコから出しちゃう毒液みたいな白いアレをそのまま口の中に出されて、ゴックンしたことだってあるんだよねえ？」

(…ゴツ、ゴックンって…まさか…)

「…そ、それも…何回かは…」

(…ウツ、ウソだろツ！…そ、そんなゴックンだとか…AV女優なんかヤラされてるようなことまで…)

「へえ～、美咲も意外に何でもヤツちやっぺんだねえ～」

「実はこう見えて、美咲ってフェラが相当上手いのかもよ～」

「…べ、別にそんな上手くなんかは…」

「ププツ…何、謙遜してんのよ～…フェラが下手クソだっぺというなら、そうやって男に口の中で出されたりするわけがないじゃ～ん」

「だよね～普通は、フェラの後で絶対にオマンコに挿れようって思ってるはずだし、フェラでイッちやっぺたら、その後にチンコがちゃんと勃たなかつたりして、結局セックスできなかつたりするもんねえ～」

(…そ、そう言われてみれば…たしかに…)

「だったら、そうやって思わず暴発してドピュッて出てきちゃった男の『ザーメン』ってのをゴクンしてみてもどう思ったの～？」

(ザッ、ザーメンっていうのは、所謂…せ、精液のことを…)

「…ど、どうって…それは…初めは…あまりに突然のこと過ぎて、モノ凄いビックリしちゃって…ま、まさか…男の人のその…ザ、ザーメンっていうのがあんなにも苦くて、ドロドロしてるものだとは…」

「ププツ…だよねえ～やっぱ女側としては、好奇心で一度は飲んでみてもいいかな～とは思っただけど、アノ鼻にツンとくる独特なイカ臭いのと、何とも言えないクソマズい味を知っちゃうと絶対後悔しちゃうんだよねえ～」

「ドロドロしてたってことは、若くてイキもイイ訳だし、溜まってて毎回かなり濃い～のが出てたってことなんじゃな～い？」

「…っっていうか、そんなことよりフェラだけですぐにイッちやう早漏の方がヤバくな～い？」

「でも今の話を聞いてると、美咲がゴックンしてあげたのは、一度や二度だけじゃ済まなかったんでしょ～？」

「…そ、それは…彼氏が言うには…男はみんな飲んであげた方が悦ぶって言うんで…」

「エ～…だからって、黙ってその男の言いなりになってゴックンしてあげてるっていうのも、それってただ単に美咲が従順なだけの M 女ってことじゃ～ん」

「たぶん、その前の彼氏っていうのがオレ様タイプみたいな S っぽい感じで、男ウケするフェラの遣り方を一から十までいろいろと仕込まれたんだってえ～」

「フフツ…だったら、美咲のその彼氏仕込みの得意のフェラテクっていうのを、この目で一回みて見たくな～い？」

「アー！それいいかも～折角の機会なんだし、私たちも是非参考にしたいから、実際にココで遣って魅せてもらおっか～」

「エツ！…じ、実際につて…」

よからぬことが頭を過る…

(…ま、まさか…こんな他の男子だとか、同い年の女子なんかも全員が見てるようなところで…ホ、ホントにアレを啜えて魅せなきゃ…)

顔を引き攣らせ、その場に固まったまま動けなくなる美咲に対し、

「フフツ…」

三年の女子たちが不気味な笑みを浮かべたかと思いきや…

「ジャーン！ココにバナナがありま～す！」

(なっ！…何で…そんなバナナなんてモノが、こんなところに…?)

何処に隠し持っていたのか、独りの女子が後ろ手からバナナを取り出し、高らかに掲げて魅せたのだった…
毎年こういったことがあるのをあらかじめ想定し、初めから用意していたということなのだろう…

「ねえ、美咲～このバナナを鈴木のココンコだと思ってココで遣って魅せてよ～」

「…そ、そんな…」

とんでもない無茶振りに、美咲は頭が真っ白になる。

「別にソコに勃ってる鈴木のココンカスマミレのココンコをナマでフェラしろとか言ってるわけじゃないんだし、バナナでソレっぽくヤッて魅せるんだったら全然問題ないことじゃ～ん」

…と、否応なく、強制的にその反り返ったバナナが手渡された…

(…バ、バナナでって言ったって…ヤッて魅せなきゃイケないことはアレをスルのとナニも…)

「どうしたの～？まさかできないとか言うつもりなの～？」

当然、いくら無理だと言ったって、無駄な話だろう…というか、ココで変にごねてしまえば、逆に先輩連中の怒りを買ってしまい、ホンモノの鈴木自身を相手にしなければイケなくなってしまうかもしれないといった恐れさえヒシヒシと感じられる…

「…わ、わかりました」

と、美咲も妥協したかのように、仕方なく了承するしかなかったのだった…

(なっ、なあ…ホ、ホントに…今から…美咲の…)

(あっ、ああ…あのバナナで…フェ、フェラチオとかいう男が最も愛すべき女の所業を…)

男子がソワソワと落ち着きなく、美咲の次の出方を伺っている。

「…」

…と、しばらくジッとバナナと睨めっこしていた美咲の顔がスーッとその距離を縮めていき、そして…マンを持したかのように、ギュッと嚙んでいた口唇がゆっくりとスローモーションのようにだらしなく半開きになったかと思うと…



—…カプツ—

(アツ…)

先端の亀頭と思わしき丸みを帯びた宝冠部が美咲の小さなアヒル口の中に控えめに含まれていた。

「あ～あ、ちょっと～美咲…そうやって頭から啜えちゃったら、全然話になんないじゃ～ん」

「そうだよ～啜えてやる前に、まずは舌で先っぽとかカリのところをチロチロ舐めたりして、ガマン汁がダラダラ溢れかえってくるくらいになるまでジックリ焦らしてからでないと～」

「フフツ…やっぱ男が気持ち良さそうに涎垂らして耐えてるアへ顔を下から上目遣いで観察して愉しむくらいじゃなきゃ、まだまだフェラの修行が足りないよねえ～」

そう言って周りの女子たちが得意げな感じで、フェラチオのノウハウをこと細かにレクチャーしながら盛り上がる。

「…す、すいません…」

美咲はただ言われるがままに、その的を射た指摘に忠実に従った。

「…こ、こんな感じ…ですか？」

…と、先端の突出した敏感部にネットリと舌を這わせ、チラチラと男子の顔色を伺いながら、チロチロと擦るように優しく舐めて魅せる。

(…そ、そんなふうに…ソコを蛇みたいに舌先を器用に使って…)

「そうそう～そんな感じで裏筋だとか縫い目の処をなんかをピンポイントで弄んでやったりしてると、そ

のうちに男の方が耐えられなくなってきて『嗚呼…』とか女みたいな情けない声で鳴きながら『…も、もう啜えて…』とか言ってオネダリしてくるんだよねえ〜」

(…そ、そりゃ、あんなふうにアソコの処を上手い具合に責められたら、泣き言の一つくらい男なら誰だって…)

「ほら〜もう遠慮してなくていいから、あとは美咲がいつもどんな感じでフェラしてやってんのか、アンタの得意業を思う存分魅せてみなさいよ〜」

こう唆され、美咲ももう完全に開き直ったのだろう…

「…は、はい…いつもはこういう感じで…」

…と、まるで熟練なピンサロ嬢の先輩に教えでも請うかのように…

—…パクッ—

再び先端の部分がスッポリと口の中に完全に啜え込まれたかと思うと、スウーツと流れるように上から下へとゆったりとした浅いストロークのピストン運動が始まったのだった…

—ゴクリッ…—

そのスムーズな美咲の頭の動線を男たちが静かに息を潜め、固唾をみながら注目している。

(…ス、スゲー…)

(…み、美咲っていうのは、いつもああやって男のモノを…)

「へえ〜、やっぱそれなりにチンコを啜え慣れてるってだけあって、なかなかイイ筋してんじゃ〜ん」

男女全員が興味津々で見守る中、美咲の疑似フェラが惜しげもなく、肅々と披露されていた。

(ね、ねえ…ちょっと…コ、コレって…かなり上手い方なんじゃ…)

(う、うん…でもまあ、こうやって男のホンモノのアレをフェラをしなくちゃイケないってことになったら…誰がやったってほしいこういう感じなと思うんだけど…)

女子たちが自身のフェラチオの遣り方と照らし合わせながら、美咲の女業を評価するかのようヒソヒソと耳打ちしている。

「…」

そんな周りからの鬱陶しい声に少し魔でも差したのかもしれない…啜えられていたバナナが一旦吐き出されたかと思うと、根元から先端へとまるで引き攣った裏筋を舐め上げていくかのように舌先をネットリと這わせ、唾液を万遍なく塗っていた。

—…チュツ、チュウツ…チュプツ…クチュツ、ピチャツ…—

「フフツ…そうやって、ワザとらしく聞こえるように音を出して吸い勃ててやるあたりなんて、さすがに心得てんじゃ〜ん」

これは美咲が意図的にそうしているということなのだろうか？…口許から唾液のネバついた音が際立ち、いやが上にも聴覚が刺激されている。

(…ま、まさか…こんなふうには、イヤらしく大きな音を立てて舐めてやってるのも、美咲が男の心理を知ってての仕業だっていうのかよ…)

その本領発揮ともとれるフェラテクに見蕩れているうちにも、今度はバナナの半分ほどが美咲の口の中奥深くまで飲み込まれたかと思いきや、ヌポヌポと滑らかに出たり入ったりを繰り返していた…

「…ウ、ウンツ…ンンツ…ングツ…ウンツ…」

このように時折、漏れ聞こえてくる美咲の甘く艶めかしい吐息が、男子の昂奮をこれでもかと煽り、イチモツを必要以上に硬く、限界寸前まで漲らせていく。

「フフツ…ねえ、鈴木～ど～お？美咲にこんな感じでフェラしてもらったら、たぶん一溜まりもなく、ソッコーでイツちやうんじやな～い？」

「…」

その不躰な問い掛けは鈴木に一切届いてはいない…ただただ、到底未経験とは思えぬ美咲の女ならではの巧みな口業に、イチモツをピクピクと忙しく飛び跳ねさせ、目と心を完全に奪われてしまっていた。

「ププツ…っていうか、鈴木だけじゃなくて、ここにいるアンタらみたいな童貞だったら、間違いなく全員一分も持たずに、この時点でほとんど出ちゃってるでしょ」

(…そ、そりゃ…美咲にこんなふうにフェラなんかされたら…)

「ねえ～じゃあ、ちなみに美咲がいよいよ最期そのままホンイキで男をイカせにかかるって時には、どうやってチンコからザーメンを搾り出してやるの～？」

「…」

もうそれは今の美咲にとって、別に造作もないことなのかもしれない…

「…そ、そうなった時には…こんな感じで少しでも速くシテあげれば…だいたいの場合…」

…と、美咲のこれまでの少なくないフェラチオの経験上、男はこうすれば、口の中で然もなくイキ果ててし

まうのだろう…上から下への浅めストロークが、次第に喉奥深いディープスロートへと打って変わり、そのリズムも目まぐるいほど軽快に加速していった…

「エッー！ちょっと、ナニー！…ソレってモノ凄い動きじゃ～ん」

口許からジュポジュポと唾液の混じった卑猥な摩擦音が奏でられている。まるで美咲の身体にキツツキが憑依でもしたかのように頭が目にも留まらぬスピードで前後にピストンし、ボンヤリと残像を映していた…

(…そ、そんなに素早く…っていうか、そんなにも激しく振り乱して…)

長く美しい黒髪が四方八方に乱れ飛んでいる…と、

(なっ、なあ…手が…)

これはいつものクセがそうさせてしまったのか、惹きつけられるように、視線を手元へ移してみると、口の動きに同調するように、バナナを握り締めていた右手がいつの間にかシコシコと巧みに男を扱き上げる所作を魅せていた…

(…ス、スゲー…こ、こんなふう到手と口を上手いこと逆方向に両方同時に使って…)

右手がイチモツを扱き上げると、口が根元へと引き下げられ、それとは反対に右手が根元まで引き下げられると、口がイチモツを扱き上げるといった一連の流れるような性技がコレでもかと施されている…その男をイカせる所業に熱中するあまりか、はたまた激し過ぎる動きのせいなのか、

(アッ…あんなに涎を…)

口許の隙間からビロ～ンとネバついた一筋の唾液が根元へと滴り落ちていった…そのはしたなくふしだらな美咲のホンイキのフェラ顔を目にした途端、

(アッ…！アアッ…ちょ、ちょっと…待ってくれ！)

(フフツ、イイよ…ガマンできないんでしょ…このまま口の中に…出して…)

美咲は唇に男の最期の戦慄きを感知しながらも、その手を緩めはしなかった…結果、

(ダッ、ダメだって…み、美咲…アアアツ…！)

男たちは身体の奥底から猛然と込み上げてくる熱い昂ぶりを抑え切れず、そのままイキおい好く弾け飛んでいった…

(…そ、そんな…)

口をだらしなく半開きにし、恍惚の表情を浮かべながら天を仰いでいる…この時、男たちの妄想の世界では、誰一人として持ちこられることができず、美咲の口の中に大量の精液をぶちまけてしまっていたに違いない…

「ププツ…そりゃあ、ここまで上手い具合にフェラされたら…並大抵の男はたまらず口の中で出ちゃってるよねえ〜」

—ハアハアツ…ハア…ハア…—

部屋に男たちの荒い息遣いが充満していた…

「…」

美咲もそのただならぬ雰囲気になにか感じ取るモノがあったのだろう…

—…チュツ、チュ〜ウツ…チュボンツ…—

男から精気を搾り出したということなのか、終わりを告げるように啜えられていたバナナがイヤらしい音を勃てて吐き出された…こうして魅惑の疑似フェラをやり切った美咲がおもむろに顔を挙げてみると…

「ほら～見て見て～！全員チンコがスゴイことになってるんですけど～」

(エッ！ナニ？…コッ、コレって…)

グルリと辺りを見渡し、美咲は驚きを隠すことができなかった…

(…ま、まさか…ここまでモノ凄いことになってただなんて…)

「あ～あ、ちょっと早過ぎじゃない？もう全員ギン勃起状態じゃ～ん」

勃起していない男は誰一人としていはいはしない…並んだ男たちの数十本のイチモツはこの時点ですでに皆、青筋がクッキリと浮き勃起、今にもはち切れんばかりにガチガチに勃起させられていたのだった…そればかりか、

「ねえ、鈴木～どうだった～？アンタの彼女の得意のフェラテクってというのは？」

(…ど、どうって…)

「ププッ…どうもこうもないでしょ…鈴木の今のチンコの状態を見れば、一目瞭然じゃ～ん」

そんな鈴木の一モツはすでに暴発寸前まで追い込まれているのかもしれない…鈴口からは透きとおった大量のガマン汁がタラタラと止めどなく漏れ続け、ビロ～ンと長い糸を引いていた。

「鈴木～ココのどこ見てみなよ～コレって、まさにアンタがイッちゃった時のチンコそのモノなんじゃない～い？」

「…」

そう言ってコレ見よがしに指摘された美咲に啜えられていたバナナの先端には、白く泡立った大量の唾液がまるで男がたまらず射精してしまったザーメンかのようにベツトリとこびりついている…

(ウフフツ、エ～イヤだぁ～…私がホントにフェラしていることを想って、みんながみんなここまでいきり勃たせてくれてるだなんて…)

美咲のその表情からは、最初のオドオドした感じは一切消え、それとは真逆に、まるで痴女にでもなったかのような何とも妖しくイヤらしい笑みを浮かべていた…

(4)

「ほら～やっぱ、田中のチンコが一番デカくな～い？」

「ホントだあ～コレって、カリもおつきいし、エラの張り具合なんかもマツタケみたいでなかなかイイ感じじゃ～ん」

「でも、膨張率だったら、山下の方がスゴくな～い？さっきのちっちゃかった時の倍以上あるよう見えるんだけど～」

「エ～…それよりか山下のって、チンコよりその下にぶら下がってるキンタマの方が目がイカな～い？」

「アー！そう言われてみれば、たしかにタヌキのキンタマみたいに袋が下の方までビロ～ンって伸びてる気がするかも～」

「ププッ…だったらアッチを見てみなよ～佐藤のなんか勃起しても、ナニからナニまで相変わらずちっちゃいまんまじゃ～ん」

「…ってというか、佐藤のってアレで完全に勃ってる状態なの？…包茎の上に短小って相当ヤバくな～い？」

「エー、ヤダア～！何か自分がもし男になったとして、佐藤みたいなチンコだったらって考えたら、チョ～可哀そうになってくるんですけど～」

隆々とイキリ勃ったイチモツが亀頭の先から金玉に至る隅々まで見比べられ、佐藤に対し、情け容赦のないキツイ言葉がこれでもかと浴びせかけられる。男としてのプライドをズタズタに傷つけられ、佐藤は伏し目がちになり、しばらく底から立ち直れそうにはなかった…

「それじゃあ、こうやって男子が全員完全に勃起しちゃったことだし、これ以上もったいぶってても意味

ないから、そろそろ美咲にも脱いで魅せてもらおっか〜」

「…」

こうして男子のイチモツ品評会がひとしきり盛り上がったところで、ついに美咲にもあの宣告が言い渡される。

「ほら、美咲〜さっきから男子がずっと期待してるみたいだから、アンタも上を脱いでブラを外して魅せてみなよ」

(…ヨ、ヨッシャッ！…つ、ついに美咲の…このオ、オツパイの全貌を拝むことが…)

待ちに待ったアイリのその命令に、男たちは心の中で大はしゃぎしていた。

「…わ、わかりました」

美咲ももうそれほど迷う素振りを見せることなく、淡々と制服の上を脱ぎ捨てていく。

—パサッ…—

上半身を覆い隠していた邪魔なモノが床に落ち、白い柔肌が露わになると…

(ウオオツ〜)

お目見えした淡いピンク色のブラジャーに男子からドツとざわめきが巻き起こった。

「へえ〜…ピンクのフリル付きだなんて、思ってたよりも可愛らしいのしてんじゃ〜ん」

(…っていうか…そ、そんなことよりも…コ、コレって…)

そこから今にもはみ出しそうな二つの豊かな膨らみが目に飛び込んでくる。茜の時とは違い、美咲の胸の中央にはその大きさを物語るように立派な谷間がクッキリと形成されていた。

(スッ、スゲッー…)

(…か、かなりデケェーんだけど…)

男子側から美咲の胸を称賛するような声が漏れ聞こえてくる。しかし、美咲はまるで気にしなかった…やはり、こういった場合には男なんかより女の方が肝が据わっているということなのかもしれない…

(…いいわ…どうせこの後、男子みたいに女子だって全員脱がされて見られることになるんだろうし…そんなに見たけりゃ、好きなだけ見ればいいじゃない！)

男子のイヤらしい視線になど一切動じることなく、茜同様美咲も堂々とブラジャーのホックを外して魅せたのだった…と、その次の瞬間、そこから弾け飛ぶように二つの膨らみが、プルンと波打ちながら零れ出てくる。

「うおおっー！」

男子から抑えることのできない歓喜の声が上がった…

「エッ、ヤダァ～スゴイ！コレって、マジでおっきいじゃ～ん！」

(…コ、コレが…美咲の…)

大きな膨らみとは対照的な小振りな桜色のサークルの中央に、美味しそうな赤い果実が澄まし顔でツンと勃っている。

「フフッ…やっぱこの迫力は、さすがにDっていうだけのことはあるよねえ～」

「なんか形とか色なんかもかなり綺麗じゃな～い？」

男子だけではなく、美咲の胸は女子からも絶賛の嵐だった。その膨らみは少し重そうにも見えるが、まだ10代そこそこの美咲の胸はブラジャーを外してもほとんど垂れることなく、見事な半球形の形状をしっかり維持している。

「ププッ…ねえ、鈴木～そんな前のめりになってガッツリ見入ってないで、美咲に何か一言感想を言ってあげなよ～」

(…か、感想だなんて…そんな…)

「ほら～どうなの？こうやって、実際に初めてナマで見てみた美咲のオッパイっていうのは？」

鈴木が震える声を振り絞り、男たち全員の本音を代弁した。

「…ハ、ハイ…あ、あの…こ、こんなにも大きくて…いい、色も…ピンクで…モノスゴく綺麗なオッパイだと…」

「…」

「ププッ、美咲～良かったじゃ～ん…アンタの彼氏が言うには、かなりおっきくて、乳首も綺麗なピンク色をしてるんだってよ～」

そう言われ、美咲も恥ずかしさが沸々と込み上げてきたきたのかもしれない…モジモジと身をよじったり、小さく肩を竦めたりしながら、その男たちの痛い視線から何とか逃げようとしていた…だが

「ちょっと、美咲～そうやって、乳首を隠そうとしちゃダメじゃ～ん…こうやって男子がじっくり見て吟味してる最中なんだから、ちゃんと正面を向いて、胸を前に突き出すようにしてしっかり魅せてあげなよ～」

「…す、すみません…」

狡猾で強かな女たちがソレを絶対に許しはしない…身体の向きが元に戻されると、視線の真正面の位置に桜のような美咲の乳首がひっそりと佇んでいた。

「ほら～男子がみんなあんなのオッパイ見てこんなにビンビンにチンコを勃たせてくれてるだなんて…嬉しくな～い？」

男たちがイチモツをピクピクと忙しく飛び跳ねさせながら、目を血走らせ、美咲のそのど真ん中の一点をジッと凝視している。

(…そ、そんなに…同じところばかり、ジロジロ見なくたって…)

「まあ…たしかに、美咲のこの大きさは、巨乳とか美乳って呼べるレベルのオッパイだもんねえ～」

「…何かエッチ慣れしてるってだけあって、身体つきがかなりエロいんですけど～」

「これってやっぱ男に揉まれてると、おっきくなってくってことなんじゃない？」

これは女性ホルモンが影響しているということなのだろうか？男のコトをよく知っている美咲の胸はまだあどけなさの残る茜の胸とはまるで違っていた。胸ばかりでなく、身体全体がふっくらと丸みを帯び、幼児体型から立派な大人の女性へと着実に性長しているように見て取れる。

「ねえ、こんだけおっきかったら、美咲ってもしかして…パイズリなんかもしたことあるんじゃないの～？」

(…パツ、パイズリッていうのは…)

そのなんとも卑猥な響きの陰語に男子は聞き耳を勃てた。

「美咲～どうなの？」

「…ハ、ハイ…あ、あの…ソレも…彼氏に何度もお願いされて、シテあげたことが…」

「ププツ、やっぱそうなんだあ～…っっていうか、普通こんだけあったら、男が黙って見過ごすわけないもんねえ～」

「そうそう～男ってちょっとでもオツパイがデカかったりすると、すぐパイズリしてくれって言うてくんじゃ～ん」

「でも、彼氏なんかが言うには、パイズリって手コキなんかとは全然比べ物になんないらしいよ～オツパイの間に挟まれて扱かれるのって、柔らかさだとか包み込まれてる感が全く別モノで、すぐにイッちゃいそうになるんだって～」

まるで美咲がしている時のことを想像させるかのように、巨乳ならではのパイズリの気持ち好さを男子に言い聞かせる。

(…そ、そりゃ…美咲のあんな谷間にアレを挟まれて…パツ、パイズリなんかされた日にゃ、たぶん一溜まりもなく、瞬殺で…)

「…」

『ねえ、こんな感じでイイの？』

『あっ…アアツ…イイよ…み、美咲…も、もっとギュツと強く挟んで、速く動かしてみて…』

『う、うん…こう？…これくらいだと気持ちイイ？』

『アッ、アアッ…ソレ…すごい…き、気持ちイイツ…アッ、アアッ…ダメだよ…み、美咲…アアッ…』

『フフツ…へえ～、コレって、そうやって腰を浮かしちゃうくらい気持ちイイんだあ～』

美咲も自身がイチモツを胸の谷間にスッポリと挟み込み、そのたわわな巨乳をユサユサと激しく揺らしながらパイズリしているところを男子に想像されているのかと思うと、たまらなく恥ずかしい気持ちに苛まれていた。

「アレ～？ねえ、もしかして…ソレって、美咲のも勃ってきてんじやない？」

(エッ！)

そういつて指摘された部分に慌てて視線を落とし、美咲は自分の目を疑った…

(…そ、そんな…)

「ア～！ホントだあ～乳首がちよっと勃ってきちゃってんじや～ん」

「美咲～…コレって、どういうこと～？美咲も男子のみんなにオッパイ見られて、昂奮してきちゃったってことなの～？」

若干、硬く勃起してしまった乳首のことを指摘され、美咲が顔を真っ赤にする。

「…イ、イエ…そ、そんなことは…」

「エー！でも、今のその乳首のヒクついてる感じはどう見たって、勃ってきちゃってるよねえ？」

確かに、上向きかけたソレは勃っていないと否定するにはかなり難しかった…

「…で、でも…す、少しだけです…」

「ププツ…少しだけって、どういうことよ～こっちにはその少しだけっていうのが全然意味解んないんですけど～」

「そんな訳の解んない言い訳するんだったら、美咲もちゃんとしっかり勃たてみせてよ～」

「エツ…」

「エツ、じゃないんだって！男子が自分でチンコ扱いたりして、こうやって全員勃起させてみせてんだから、美咲だっていつもオナッてる時みたいに、自分で乳首を弄って、ちゃんと完全に勃起させてみせなかって言ってんだって！」

下半身と上半身という若干の違いがあるにせよ鈴木と同じことが美咲にも言い渡された。その口調は男子の時にも増して厳しいように感じられる。

「…」

『女だから…』などと言った甘ったるい言い逃れはできない…

「…は、はい…す、すみません…」

アイリの剣幕に美咲も観念したのだろう…渋々ながら、右手がスウーッと左側の胸の膨らみの前へと伸びていったかと思うと…



(あっ…)

その慎まし気なサークルの中心部に備え付けられた赤い突起物がキュッと優しく摘み上げられていた…そして、それを親指と人差し指の二本を使ってクニクニと優しく捏ね回し始めていると…

(アッ…アアッ…)

美咲が顔を大きく歪め、切ない表情を魅せる。

(なあ…こ、これって…美咲が、いつもシテる…)

(あ、ああ…たぶん、こんな感じで…アソコのところを…)

そんな美咲が自分自身で乳首を控え目に弄り、身悶え慰めている姿を男子が目を皿のようにして見詰めていた。

(…ま、まさか…み、美咲が目の前で…こ、こんなことシテるだなんて…)

(なっ、なあ！見てみろよ！…何か…ち、乳首が…ちよっとずつ…)

刺激を受けたことで、美咲の乳首がピクピクと騒がしく蠢き、瞬く間に変貌を成し遂げようとしている…が、男たちにとってのこの夢のような一時はあっという間のことだったかもしれない…

「…あ、あの…すみません…もう…た、勃ちましたけど…コノくらいで…」

それは時間にして正味5秒もかからなかったのではないだろうか？…その本人の申告通り弄られた美咲の乳首は先程よりも一回りは大きく、見た目ではっきり判る程にツンと上向きに硬く勃起していた。

「ほら～、さっきとは全然違うじゃ～ん」

「フフツ…やっぱ、チンコと同じで、乳首もそうやってビンビンに勃つと余計にエロくみえるよね～」

(…そ、そんな…私ったら…こ、こんなみんなが見ている前で…じ、自分で弄って…勃たせるところをしっかりと見られたなんて…)

そんな乳首を硬く勃起させ、顔を真っ赤にしながら、恥じらう美咲のいじらしい姿に、男子が普通の感情でいられる訳がない。

「アツ…ほらほら、見て～！佐藤の先っぽからもガマン汁が垂れてきたんだけど～」

「エー！ウソ～佐藤も先走っちゃったの～？」

「ププッ…っていうか、それって佐藤だけじゃないじゃ～ん…ちゃんとよく見てみなって～田中のとか山下の先っぽだって濡れて光ってきてるし～」

「アー！ホントだぁ～コッチのチンコからもガマン汁がチョロっと顔出してきちゃってんじゃ～ん」

「ねえ～アンタたちさっきからちよっとお漏らしし過ぎなんじゃな～い？」

男たちの反応は想像以上だった。披露された豊満なオッパイと美咲のオナニーまがいの行為によって硬く勃起した乳首の見事なコントラストが男たちのイチモツを限界ギリギリまでいきり勃たせ、その結果…先っぽからジワジワと透明な液体を滲ませる。

「フフッ、今の美咲の乳首弄りは、童貞クンたちにはちよっと刺激が強過ぎちゃったのかな～？」

「あ～あ、ヤバくな～い？もう他のどのチンコからもどンドン漏れ始めてきちゃってんじゃ～ん」

すでにこの時点で全員の男たちのイチモツの鈴口から、先走ったガマン汁がタラタラと漏れ出し、今にも長い糸を引こうとしていた。

「ねえ、アンタたち今からそんなに先走らせて、大丈夫なの～？」

(…そ、そんなこと言われたって…)

その女子の言い草は、とても心配しているようには思えない…むしろ、男子をより昂奮させることでイチモツからジュークジュークと止め処なく、滴り落ちてくる先走り汁を見て愉しんでいるのである。もちろん、男子の方はとても大丈夫だと言える状態ではないだろう…

(…こ、こんなギリギリの状態で女子のこんなのをいつまでも魅せられ続けたら…)

大きな不安だけが募ってくる。これ以上、昂奮させられてしまつては、別に本体自体に一切何も触れれずとも、直立不動の状態のまま、視覚のみの刺激だけで、別の違うモノまで飛び出してイッてしまうかもしれない…そんな男たちの危うい状態を知ってのことなのか…

「ププッ…そうやって透明なのは、いくら出してもいいんだけど、お願いだからソコでホンイキの白い方の液まで飛び出しちゃったりしないでよ〜」

と、女子たちが高笑いしながら、暴発寸前の男たちに釘を刺す。

「イヤダァ〜いくらなんでも、さすがにナニもする前からソレはないって〜」

ここまで追い込まれた状態で美咲の大役は終了したのだった…

(5)

「フフッ…それじゃあ、次は…」

一年の女子たちも一人ずつ順に指名され、男子全員の注目を一身に集める中、ブラジャーを脱ぎ捨て、否応なく、未成熟なオツパイを露にしていった…

「へえー！コレはまた、ずいぶんと色が濃くて、乳輪が結構デカ目じゃ～ん」

(…そ、そんなこと…)

本人が一番気にしているところを大きさに囁し立てられ、この上ない辱めの性裁を受ける破目になる。

(…た、たしかに…他のヤツらのと比べると…ピンクって言うよりか、断然黒ずんでるし…それよりも…にゅ、乳輪のサイズが明らかに一回り以上デケーんだけど…)

もちろん、男のイチモツと同じように、女のオツパイにだって、その大きさ、形、乳輪や乳首の色などに至るまで、その種類は人によって様々あるだろう…

「アレ？…ってというか、コレって先っぽが陥没しちゃってな～い？」

(…そっ、それは…)

そのことを目敏く指摘された女子の顔がみるみるうちに赤みを帯びていく。

「アー！ホントだぁ～…左側の方が中にすっぽり埋まって完全に顔を隠しちゃってんじゃ～ん」

(…マッ！マジかよ…こ、こんな…まるでクレーターみたいに内側に凹んじまってて、アソコの中心にあるべきはずのツンとしたモノが影も形も…)

初めて見るその少し変わった形状に、男たちは驚きの色を隠せなかった…

「ねえねえ、知美～…アンタのコレって、陥没乳首ってヤツだよねえ～？」

「…は、はい…」

ソコは人に決して触れられたくない知美の最もデリケートな部分だったに違いない…今にも掠れてしまい
そんな小さな声で、知美がいたたまれなさそうに首を縦に振った。

「エー！ヤダァ～…こうやって、乳首が中に埋まっちゃってんのを実際にナマで見たのって、初めてなん
だけど～」

一方、周りの先輩連中は面白いモノでも見つけたかのように、前のめり気味になりながら、その欠点部に穴
が開いてしまうのではないかというほどマジマジと観察している。

(…そ、そんな…珍しいモノを見るみたいに…)

男が包茎をコンプレックスに持つのと同じように女にとって陥没乳首というのは、相当コンプレックスな
のだろう…

「でも、見た感じそんな言うほどでもなくな～い？たしか、ホントにヒドイのって、ずっと中に埋まった
まんまの状態です手術とかしないと外に出てこないって聞くじゃ～ん」

「ねえ、知美のコレはどうなの～？…まさか、こうやってずっと埋まったまんまの状態って訳じゃないん
でしょ？」

「…は、はい…そ、そんなことは…」

「…ってことは、アンタが昂奮してきたりだとか、直接刺激してやってコレが固く完全に勃起したら、普通の乳首みたいに外に露出してくるんだよねえ？」

「…は、はい…そ、そうなった場合には…普通に…」

「ほら～だったら、別に全然問題ない話じゃ～ん」

「フフツ、なら当然…今、中に隠れちゃってる知美のその乳首が元気良く外に顔を出してくれてるところが見てみたくな～い？」

「ねえ、鈴木～！その顔はアンタだって絶対見たいって思ってるよねえ～？」

「エッ！…そ、それは…」

「ププツ…何キョドってんのよ～…ってというか、鈴木だけじゃなくて他の男子だって全員、知美のこの乳首がホントにちゃんと正常に飛び出してくるのかどうか見たいって思ってるでしょ～？」

賛同の声は聞こえてこなかったが、男たちは皆、示し合わせていたかのようにウンウンと首を縦に激しく振って見せている…

「ほら～！知美～解ってもらえたよねえ？男子がみんなアンタのその陥没乳首が完全に勃起して、ちゃんと外に突出してる状態が見てみたいんだってえ～」

「…」

その解るだろ的な命令に対し、知美の右手が渋々ながらも左胸へと伸びていった…

(アツ…)

右手がそっと接触を試み、マシュマロのような白い膨らみをやわやわと優しいタッチで揉みほぐしている。

「へえ～、知美がいつも自分でシてる時って、そんな感じでオッパイを責め勃てるんだあ～」

見られているということ意識させる為の仕業なのかもしれない…先輩女子たちがニヤニヤとイヤらしい笑みを浮かべながら、知美の恥ずべき行為を実況中継した…

(…あ、あんな普段は真面目でおとなしい感じなのに…と、知美のヤツもホントはこうやって独りで…オッパイだとか、もっと下の処なんかを弄って…オ、オナニーを…)

唇をキュッとキツく噛み締め、知美が自分自身で慰めている痴態を男子たちが食い入るようにジッと見詰めている…細長い人差し指が少しずつ乳輪との距離を縮めていき、周りから徐々に責め勃てるようにそのサークルの上をなぞるように優しく丁寧に捏ね回していた。

(…こ、こんな…自分で弄って…ち、乳首が勃っていく過程を…最初から最期まで全部見られちゃうだなんて…)

四方八方から浴びせかけられる熱い眼差しが、身体中のいたる所にグサグサと突き刺さり、恥ずかしさで胸がイッパイだった…

(…お、お願い…は、はやく…)

知美もこんな晒しモノのような仕打ちはさっさと終わらせてしまいたかったに違いない…だが、そんな本人の切望とは裏腹に、か弱く控えめな刺激だけでは、状態になかなか変化は見られなかった…

(…)

反応が鈍いことに諦めたのか、人差し指がいよいよクレーターのように入んだ核心部へと伸びていき…そ

して、そこから指先でコショコショと穿り出すような特異な動きを魅せ始めている。

(…そ、そんなふうにして、アソコのド真ん中の処をピンポイントで…)

(アアッ…)

反応の違いは一目瞭然だった…

「ねえねえ、何か先っぽの所がヒクヒクしてちょっとずつ盛り上がってきてんじゃない？」

敏感部が刺激を受けたことで、ピンク色の部分全体が徐々に隆起し、その頂点がムクムクと、今にも頭角を現そうとしている。

「ほら、知美～あともうーイキって感じになってきてんじゃ～ん…男子が見てるからって、そうやってチンタラやってないで、いつもオナッてる時みたいに、もっと人差し指で乳首をコリコリ刺激してやってさっさとビンビンに勃たせて魅せなよ～」

「…」

猫を被ってやり過ごすことなどできやしない…言われるがままに、さらに露出を促すよう親指と人差し指で両サイドからグッと少し力を込めて摘まみあげてやると…

「アアッ…」

知美の口から微かに艶かしい喘ぎ声が漏れてきたかと思いきや、それに吊られたかのように…

ーグッー…グッグググッ…ポコンッ！ー

「キャァー！スゴ～いッ！ねえ、今の見たあ～？ホントに飛び出てきたんだけど～」

突如、中からプツクリとした薄紅色の突起が勢い良く露出し、その愛くるしい全貌を現したのだった…

(スツ、スゲー…)

(マツ、マジで…中から…ロケットが出てくるみたいな感じで…)

(あっ、ああ…さっきまでは、ほとんど隠れてて、ナニも見えなかったはずのに…ホ、ホントはこんなパチンコ球みたいな大きさの…)

「ププツ…ほら～せっかくこうやって元気に顔を出してくれたんだから、男子はしっかり目に焼き付けておかないと～…ど～う？知美のナマ乳首ってというのは？」

陥没していた乳首が勢い良く外に飛び出した瞬間の映像というのは、年端も行かぬ男たちにとってかなり衝撃が大きかったのかもしれない…

「ねえ、山下～下なんか向いてないで、もっとよく見なよ～知美のコレって、思ってたよりも大き目で野イチゴみたいじゃな～い？」

(…の、野イチゴって…)

目を逸らすことさえも許されなかった…顔を挙げ、視界に飛び込んできた知美のソレは真っ赤に色付き、ココを見て下さいとでも言わんばかりに、こちら側へピンと突き刺されてる。

(アッ！…な、何か…ちょ、ちょっと！)

ビンビンに勃起した知美のいかにも硬そうな乳首を目にした途端、頭に血が昇るようなこれまでにない昂奮が全身を目まぐるしく駆け巡ってイクのが解った。そのあまりの昂奮状態に、身体中が一気にカーッと熱くなり、それと同時に下半身の奥底からマグマのように沸々と猛烈な勢いで込み上げてくるモノが感じられる…

(エッ!…そ、そんな…ま、まさかつ…このドクドク脈打つ感じっていうは…アッ! 待ってくれ! も、もう…ヤッ、ヤバいッ!)

ナニかを恐れ、慌てて両手で前を抑えたのだが、こう思った時には、もうすでに手遅れだろう…一度猛り狂ってしまったその男の精なる律動を、高校生に成りたての若い童貞男が途中で抑止することなどできやしない…

「アッ…アアアッ…」

そのまま押し流され、最期まで達してしまったのか、何処からともなく、弱弱しい男の哀し気な声が漏れてくる。

「ちょっと～一体、何だっけ言うのよ～? 今の気持ち悪い声は～？」

何事が起きたのかと思い、その声の主の方向を見渡してみると…

「エッ! ナニ…? キャァー!」

異変を目撃した女の方からは、次々と甲高い奇声が発せられた。

「アー! ねえ、みんな見てみなよ～! 何かコイツとんでもないことをしでかしちゃってるみたいなんだけど～」

弾んだような声に誘われ、注目してみると…一人の男が肩をこれでもかと小さく竦め、股間を両手で覆い隠しながら、顔面蒼白になっている。

(…そ、そんな…こんなことって…)

「アレアレ～？山下～そんな泣きそう顔してどうしちゃったの～？」

もうこの時点ですでに、男の置かれている状況を全て見抜いているのかもしれない…三年の女子がニヤニヤと薄ら笑いを浮かべながら、下から顔を覗き込んでくる。男は自分がヤラかしてしまったあまりの失態に、何も答えられず、心ココにあらずだった…

「ねえ、何でそうやって黙ったまんま、手で隠しちゃんでんの～？こうやって知美が乳首をしっかり勃たせて魅せてくれたんだから、アンタもちゃんと女子の方に勃起してるチンコを魅せててくれないと～」

「…い、いえ…そ、それは…そ、その…」

動揺し、言葉がしどろもどろになってしまう…

(…ど、どうしよう…い、今…こんな状態のモノを…女子に見られたりなんかしたら…)

この時、女子側に隠された男の手のひらには、ベトベトした気持ち悪い感触がハッキリと残っていた。

(ねえ…山下のヤツ、明らかに様子がおかしくない？)

(う、うん…何かついさっきまではチンチンもピンピンに勃ってて元気イッパイって感じだったのに、今は身体から精気が全部抜けちゃったっていうか、シュンとして小さく萎んじやったような気がするんだけど…)

新入部員の女子たちが男の様子の変化に違和感を抱きながら、不思議そうに首を傾げている。

「プッ…ププッ…っていうか、今アンタの手の指先から床に垂れ落ちてきたそのドロっとした白っぽいカルピスの原液みたいなのは、一体何なのかな～？」

「エッ！」

指摘され、慌てて視線を落としてみると…たしかに、その当人が勃っている股間の下には、ナニか得体の知れないゲル状の白濁した粘液がポタポタと滴り落ちてきていた。

「…あっ、あの…コ、コレは…な、何て言うか…」

この直前、二度三度と勢い良く振り掛けられた大量の熱いモノが、手のひらの中に収まりきらず、漏れ出しているのである。

(エッ！ナニ？…どうということ？…こ、この白いネバついたので、まさか…)

言い逃れすることのできない明らかな物的証拠を女子全員に興味津々で凝視され、山下は顔を真っ赤にしながら、その場に茫然と立ち竦んだ。

「アレ～？ねえ、何か山下の方から変な臭いがしてきてな～い？」

「エー、何～？…アー！そう言われてみれば、たしかにその白い液の所からイカクサイ臭いが漂ってくるみたいなんですけど～」

(…こ、この栗の花みたいな鼻にツンとくる独特な臭いって、男のアレの…)

(う、うん…そうだって…ってことは、やっぱソコに漏れ出ちゃってるのって…ガマン汁なんかじゃ済まされない山下の本イキの…)

一年の女子たちもこの不可解な状況を次第に理解していったのか、隣同士顔を見合わせ、ニヤニヤと妖しい笑みを浮かべ始めていた。

「ほら、そうやっていつまでも隠してないで、チンコが今どんな状態になってるのか、その邪魔な手をどけて、女子のみんなに魅せてみなって～」

「エッ！…そ、そんな…待って下さい！アツ…アアツ…」

両サイドの先輩女子たちに手を無理やり引き剥がされ、その決定的失態部が明るみになってしまう。

「キャァー！ナニコレー！」

再び響き渡る女子の黄色い歓声！

「イヤダァー！なんかチンコの先っぽからチョロっと白いのが顔出してきちゃってんじゃ〜ん！」

「ねえ、山下〜コレって、どういうこと〜？アンタ、まさか…イッちやったの〜？」

「…そ、それは…その…」

山下は何も反論できず、太腿の外側にギュッと握り拳を押付けながら、ただただ小さくなっている。

（ちょっと…コ、コレって…どう見ても…せ、精液…だよねえ？）

（ウ、ウン…間違い無くそうでしょ、フフツ…ってことは、山下のヤツって、ホントに…）

「ププツ…っていうか、恥ずかし過ぎて自分で認めたくないみたいだけど…こうやってチンコの先から透明じゃない真っ白な精液が漏れ出てきちゃってるし、こうしてるうちにもチンコ自体がどんどん萎み始めてんだから、アンタがもうすでにイッちちゃってるっていうのは、ココにいる誰が見たって明白なコトなんだって〜」

「キャハハハハハッ！」

コトの真相がはっきりと解り、部屋中に女子の高笑いが響き渡った。

「ねえ…さっきからそうやって、何とか必死に隠そうとしてるみたいだけど、コッチにはもう全部バレてんだから、手をひらいてソコに出てるアンタのイッた証拠を魅せてみなよ～」

こう言われ、山下も完全に観念したのだろう…泣く泣くその硬く握られた拳を女子の目前に、ゆっくりと広げた魅せたのだった…

「キャアー！ヤダア～！ものスゴイことになってんじゃ～ん！」

女子たちが山下の手のひらを確認し、いっそう大騒ぎする。

「ほら～みんな見てみなよ～コイツこんなにネバついた濃い～のを手から溢れそうになるくらい大量に出しまくってんだけど～」

(エッ…こ、こんなにも…タップリと…)

ソコには、男の絶頂の証である濃厚な精液が巨大な湖を創っていた。

「イヤダアア、何でチンコを扱きも何もしてないのにイッちやってんの～」

「あ～あ…さっきあれだけ白い方の液は出しちゃダメだって言っておいたのに～」

(ねえ…こ、こんなことって、ホントにあるの…?)

(エー、普通に考えたら、ありえないことなんじゃない？…だって、まだナニもしてないのに…こうやって精液の方が出てきちゃうだなんて…)

「ププツ…ってというか、知美の陥没乳首が飛び出てきたのを見て、コッチの男の方は思わずザーメンが飛び出ちゃうだなんて、ホント笑かすことしてくれるよねえ～」

強張り自体に指一本触れることなく、視覚のみの昂奮で飛び出してイッてしまった男の白濁液を目の当たりにし、女子が驚きとそれにも増したしたり顔で面白がっている。

「毎年必ず一人か二人いるんだよねえ〜…こうやってナニもする前から勝手に暴発しちゃうどうしようもならない早漏の男っていうのが…」

この女子たちの話から察するに、最初からこうして男子を限界ギリギリの処まで勃起させ、あわよくば、そのまま最期射精にまで至らしめて魅せるというのが最大の狙いなのだろう…

「ホント、早いにもほどがあるよねえ〜」

「ププツ…でもさあ、やっぱこうやって山下がたまらず射精しちゃったってことは、他の奴らだってこれ以上持たせるのは、さすがに無理なところまできてるってことなんじゃな〜い？」

「…」

そういうことなのか、男子から異論の声は全く挙がってこなかった…

「…っていうか、コイツらの勃起具合を見てれば、もう暴発寸前に決まってんじゃ〜ん！このままチンタラしてたら、別のチンコからもゾクゾクと二発目、三発目のザーメンが飛び出てきちゃうって〜」

「フフツ、たしかにそうみたいね…じゃあ、少しもったいない感じもするけど、残ってるあとの女子には、まとめて一気に脱いでもらうことにしようか〜」

「賛成〜！」

こうしてここまでの一人ずつ時間をかけた自己紹介から一転、一年女子全員のオッパイが惜しげもなく、瞬く間に露わとなっていった…

「…」

「ねえ、こうやって見ると…やっぱ美咲のが一番おっきいんじゃない？」

「さすがに、Dカップってだけのことはあるよねえ～」

「でも、その割に乳輪は普通サイズじゃな～い？」

「乳輪だけで言ったら、里奈のがダントツでデカイじゃ～ん！」

「…い、いや…」

「ププッ、ちょっと～！里奈ったら、何恥ずかしがって腕で隠そうとしてんのよ～」

「そうだよ～もっと男子のことを昂奮させて、もう一人暴発させちゃうくらいのつもりで、オツパイを突き出して乳輪を魅せつけてやりなよ～」

「…す、すいません…」

先輩たち指図にされ、里奈自身の手によってパイオツが下からむんずと持ち上げられる。

「ほら、山下～アンタもしっかり見なさいよ～…ど～う？やっぱこのくらい乳輪がデカいと、迫力があってかなりエロくな～い？」

目の前に『どうぞ』と差し出されたその巨大な乳輪は余りにも卑猥だった…

「…は、はい…お、大きくて…モノ凄くイヤらしいです…」

「ププッ、そりゃそうだよねえ〜今、里奈のこの乳輪見て、またアンタのチンポがどンドン勃起し始めてきてるもんねえ〜」

ついさっき大量の精液を放出したばかりだというのに、ダラリと項垂れたはずのイチモツがピクンピクン飛び跳ね、再び鎌首を擡げようとしている。

「逆に一番ちっちゃいのは…沙織のでしたあ〜」

そうはっきりと現実を突き付けられた沙織の顔は真っ赤だった。

「だって、Aカップだもん、仕方ないって〜」

「…ってというか、洗濯板並に真っ平らじゃ〜ん！」

「さすがにコレだけペチャパイだと、パイズリなんかは絶対にムリな話だもんねえ〜」

「でも、ちっちゃい方が感度がイイって聞くから、沙織ってかなり敏感なんじゃない？」

男子と同じように、女子もオツパイの大きさやその形を格付けされていく。男たちもまた、並んだオツパイの中から理想のモノを吟味し、その恥じらう顔とを照らし合わせていた。

「フフッ、イイ眺めじゃ〜ん」

下半身を丸出しにした男子と上半身を丸出しにした女子が相對し、一列に整列させられていた。お互いが相手の曝け出された部分にチラチラと目を配り、顔を赤くしている。その周りを征服に身を包んだ上級生の女子たちがグルリと取り囲んでいた。

「男子も女子もどっちも負けず劣らず全員ビンビンに勃っちゃってるよねえ〜」

男子のイチモツはもちろんのこと、女子の乳首の方もツンと上を向いて誇らしげに硬く勃起している。

「ねえ、アイリ…もういい加減イイんじゃない？」

「そうね…じゃあ、そろそろ次のステージにイッてもいいかしら？」

「も～う、アイリったら何もったいぶってんのよ～こんだけ勃起してるんだからイイに決まってんじゃない！さっさと始めてイこうよお～」

(…は、始めてイこうって…今度は一体何を…)

「フフツ、いいわ…じゃあ、みんな準備して」

アイリの指示に従い、二年の女子がテキパキと動き出す…こうして、一年が不安を募らせる中、あっという間に会場設営は完成した。

(…コ、コレって…やっぱり…)

男子が勃っている目の前の床一面に、新聞紙が所狭しと敷き詰められている。

「…」

これがあらかじめ何の為の処置かは、いくら頭の鈍い男でも見当がつくだろう…

「…では、これより男子の皆さんによる射精大会を始めてイきたいと思いま～す」

「キャァー！」

アイリの口からその予想通り事が宣言され、場内に割れんばかりの黄色い声援と大きな拍手が巻き起こった。それとは正反対に男子の表情が真っ青になってイク。

「ルールはいたってシンプルよ…ただ自分で自分のチンコを扱って、隣りに勃ってる他の男のチンコよりも早く射精して濃い精液を勢い良くたくさん飛ばして魅せてくれればいいってだけのことだから…」

(…は、早く射精して…せ、精液をたくさん飛ばして魅せればって…そ、そんな簡単そうに…)

「アンタたちだってさっきからずっとそうやって勃起させたままなんだし、ホントはそろそろ一発抜いて楽になりたいって思ってたんじゃないの〜？」

「ププッ…ってというか、こんだけガマン汁垂らしまくりの状態なんだから、コイツらだってホントはもうシコりたくてシコりたくてたまんないはずだって〜」

「…」

たしかにその推測に間違いは無い…ここにくるまでの間、もうかれこれ30分以上ずっと勃起状態が続いていた。このままのナマ殺し状態がいつまでも続いては、そのうち気がおかしくなってしまうかもしれないといった恐れさえ感じられる…

「今年は何分持つか〜？」

「たしか、去年は5分も持たなかったんじゃないか？」

「こんなに先走らせてるんだから、今年もあっという間にき出して終わりでしょ」

男子の心境とは裏腹に女子がこれから行われるその大会の展望を愉しそうに談笑している。

「ああ…言い忘れてたけど、イキそうになっても、最期射精して魅せる時は、一人ずつ順番だから」

アイリが後から余計な一言を付け足した。そればかりか…

「それと、イク時は必ず手を挙げて、大きな声で自分の名前と『出します』っていつてから精液を出して魅せるように！」

(…そ、そんなあ…)

な、なんと自己申告制が強いられたのである。

「ウフフツ…さあ、全員準備はいいわね…それじゃあ、位置について…用意…スタート！」

こうして射精大会の火蓋は心の準備をする間もなく、いきなり切って落とされたのだった…

(6)

「ほら～、ナニしてんのよ～！こうやって一年の女子がみんなオツパイを丸出しにして、アンタたちがオナニーし易いようにオカズになってやってんだから、黙って突っ勃ってないで、さっさと手を動かして、溜まってるモノをスツキリ全部抜いちゃいなよ～」

(…ぬ、抜いちゃいなって…)

男たちはただただ戸惑っていた。チラチラと周りを見回し、お互いの出方を牽制している。

(ねえ…ホ、ホントに…今から男子が自分でシテいるコトを…)

セイキの一戦を前に、観戦する側の一年の女子たちは、落ち着きなく身体をモジモジくねらせながらも、目は期待と好奇心でらんらんと光り輝いた。

(…せ、先輩たちだけならまだしも、こんな同い年の女子が全員コッチをガン見してるっていうのに…抜いて最期までイッて魅せなきゃ…)

いつまでも踏ん切りがつかず、なかなか遣り始めようとしなない男たちにイラッときたのかもしれない…

「言っとくけど、射精できずに最期まで残った人には罰ゲームがあるから、さっさと遣って早めにドピュッと出しちゃった方が身の為だと思うけど…」

「エッ！…す、すみません…罰ゲームって言うのは一体…？」

「エ～、何～知りたいの～？」

女たちの不気味な薄ら笑いが男たちを震撼させる。

「フフッ…まだ、今は知らない方がいいんじゃない？たぶん、アンタたち男にとってみれば、かなりハードな内容だと思うけど～」

(ハッ、ハードって…)

もったいつけてはっきり言わないことが更に男たちの恐怖に拍車を掛けた。とんでもないことが頭の中を過っていく…と、男たちはキョロキョロと隣り同士顔を見合わせ…そして、一斉に己のイチモツへと手を伸ばし始めたのだった…

「ウフフッ…ほら、見て～！始まったみたいだよ～」

スタートに多少手間取ったが、ここでようやく若くてイキのいい男子全員による射精大会の幕が切って下ろされる。

「キャァー！ヤダァー！」

各々がビンビンにいきり勃ったイチモツの砲身をギュッと力強く握りしめ、右手を素早く上下にピストン運動させていた。そんな目の前で男子がシコシコとオナニーに精を出す勃起姿に、女子は皆、ニヤニヤとそれぞれの遣り方や表情などに隈なく目配せしながら、子供のようにキャッキャッとほしゃいでいる。

「へえ～…アンタたちって普段、最初からそんなに素早く扱いてオナッてるってことなんだあ～」

「…」

男の最も恥ずべきオナニー姿を女子にマジマジと凝視され、男子の顔は皆、茹蛸のように真っ赤だった。

「ねえ、佐藤～今、どんな感じ～？そのくらい早いペースでシコシコするのが気持ちイイの～？」

セインをかけた男の戦いの真っ最中だというのに、女子がワザとその気をそらすように質問を投げ掛けてくる。

「…ハッ、ハイ…き、気持ちイイです…」

「ププッ、そりゃそうだよねえ〜…見てると、さっきからず〜とチンポの先からガマン汁が出っ放しで垂れ流し状態になってるもんねえ〜」

「…」

「ほら〜アンタたちも後ろでコソコソしてないで、こんな機会めったにないんだし、もっと前に来てじっくり見てみなよ〜…ど〜う？こうやって同い年の男がしてるオナニーを実際にナマで見た感想は？」

(…ど、どうって…)

一年の女子たちは皆、初めて見るその異様なまでの淫靡な光景から一切目を離せず、驚きと昂奮を隠せなかった。

(…あ、あんなに激しい勢いでアレを…バ、バカの一つ覚えみたいに、単調に繰り返し擦り上げて…)

(ねえ、何か…ちょっと…ス、スゴ過ぎちゃって…おかしくなってきたけど…)

(う、うん…だって…お、男のオナニーって、ああやって硬くなった竿の処を何度も何度もシコシコ扱き続けてイッたら…最後の最期にはアソコの先っぽの処から…)

(…っていうか、ホントにこの後、男子が一人ひとり…イッ、イッちゃうところを一部始終ずっと魅せられたら…たぶん、コッチの身が…)

「ププツ…やっぱ毎年思うけど、こうやって男が全員横一列に並んでチンポ扱いてるとこ見るのって、躍動感があるっていうか、迫力とエロさがハンパなくて、こっちも昂奮してきちゃうんだよね～」

「そうそう～何かオナニーしてるっていうか、まさにセンズリしてるって感じだもんねえ～」

「アー！たしかに～」

（エツ？ねえ…セ、センズリって？）

（エー！アンタまさか、ホントに知らないの？男がするオナニーのことをセンズリって言うんだって…たしか、ああやってイクまで千回擦るからセンズリっていう話らしいけど）

（…せっ！千回って…男って、そんなに数え切れないくらいこのままずっとアレを扱き続けるものなの…？）

（ププツ…そんなに驚かなくて大丈夫だって～別にそこまでしなくても、もう全員こんなギリギリの状態なんだし、あんなペースで扱いてたら、絶対その半分ももたずにソッコウで終わっちゃうから…）

（そうそう…童貞とかホントに早い男なんかだと、三擦り半とかいって、見てるコッチがビククリするくらいアツという間に出しちゃうんだよねえ～）

（…だ、出しちゃうって…もしかして…アレのこと…？）

（そんなの決まってんじゃ～ん…射精するのよ…シャ・セ・イ…）

（…しゃ、射精…ってことは、つまり…）

（ウフフツ、そう…ほら、目を逸らさずによく見てなきや…たぶん、もうすぐにでも、あの並んでる中のうちのどれかのチンポの先から…ドピユツて、毒液みたいな真っ白いネバネバした精液が勢い良く飛び出してくるんだから…）

(…う、うん…)

その瞬間のことを想像すると、ここにいる半数以上が初見となる一年の女子たちは昂奮を抑え切れなかった…女としての性なのか、思わず股間がジュンと疼き、身体の奥底からナニか得体の知れないモノがジワジワと滲み出しているかのような陰湿な感覚に襲われる…

「何かみんな最初から結構飛ばしてるって感じじゃな～い？」

「あ～あ…そんなに激しいペースで扱ってたら、ソッコウでイツちゃうじゃ～ん」

(…そ、そんなこと言われたって…)

一刻も早く射精しなければ、世にも恐ろしい罰ゲームが待っているのである。手の動きがどんどん速くなってイッてしまうのは、至極当然のことだろう…

「ねえねえ、誰が一番最初にイツちゃうと思う～？」

「エ～！それだったら…絶対、佐藤だって～ほら、アレ見てみなよ！ガチガチになり過ぎて竿の部分の青筋がクッキリ浮き勃ってんだけど～」

「アー！ホントだあ～、今シコリ始めたばっかだっというのに、もう亀頭が爆発寸前って感じになってんじゃ～ん」

「ププツ…山田のも見てみなよ～先っぽからガマン汁が垂れて糸引いてんだけど…どっちかっていったらアレの方が早そうじゃない？」

「あ～あ…ちょっと、どうすんのだよ～まだイク前だっというのに、そんなにずつ～とオモラシし続けてるから、新聞紙がすでにガマン汁でベトベトになっちゃってんじゃん」

「…っていうか、そんなことイッたら、もうどれを見たって、先濡れし過ぎでテカテカになってるし、いつどのチンポから本気汁が飛び出ちやってもおかしくない状態だと思うんだけど〜」

「キャハハハッ！まあ、たしかにねえ〜」

「…」

普段、人に決して見せることのないオナニーを女子にマジマジと視姦され、男子は今までに味わったことのない羞恥心と昂奮を憶えていた…そして、それは絶頂に達するまでの時間を驚くほど短いモノにする。男たちが扱き始めてから、わずか30秒といったところだろう…

「アレアレ〜？アンタたちどうしたの〜？そんなツラそうな顔しちやって…まさか、もうイッちやいそうになってんの〜？」

すでに過半数を超える男たちが顔を大きく歪め、ハアハアと息を荒げていた。

「ねえ、見てみて〜！コレって早くも限界寸前って感じじゃない？さっきから先っぽの所が凄いピクピクしてきてるんだけど〜」

「ププッ…きてます、きてます」

(アッ…アアッ…ダ、ダメだ…ホントにもう…)

…と、女子たちの読み通り、その男の左手が伏し目がちにスーッと拳がっていった…

「…あ、あの…す、すいません…これ以上ガマンが…イッ、イッちやいそうなんですけど…」

掠れた声だったが、その苦し紛れの申し出に、女子の視線がドツと集中する。

「ねえねえ、みんな今の聞こえた～？山田がそろそろイキそうなんだってよ～」

「ププッ、エー！もう出ちゃうって言うの～？まだ始まって1分も経ってないんだけど～」

「ほら、やっぱ言ってたとおりじゃ～ん！何か早漏っぽい顔してるんだって～」

「あ～あ、さすがにこの超絶怒涛の早さは、マジで三擦り半っていうヤツじゃ～ん」

「…」

屈辱的な罵声を浴びせ掛けられながらも、現に自分が一番手とあったのでは、何も反論できやしなかった…

「フフッ、トップバッターは山田で決まりね、イイわよ…じゃあ、山田はまずお勃ち台の上に昇って、女子の見ている前で大きな声で射精宣言しなさい」

こうしてたった独りお勃ち台に昇らせることで、女子全員の視線が山田のイチモツ一点に降り注がれる。

「みんな～心の準備はイ～イ？今から山田が射精してこのチンポの先から精液を飛ばして魅せるから…ちゃんと男のイキ様っていうのを注目して見ててあげて～」

「エッ…そ、そんなぁ…注目だなんて…」

「フフッ、山田～何、泣きそうな顔してんの～アンタが射精してる時の情けないイキ顔を、ここにいる女子全員でしっかり見届けてあげるから～」

「…」

羞恥の極みだった…だが、この段階ですぐ首元まで込み上げてきている射精の衝動を高校生の若い男たちが抑え込むことなどできる訳がない…

「ほら、ガマンできないでしょ？コッチはいつでもイイわよ…射精する前に自分の名前と大きな声で『出します』ってイッてから白い液を思いっきり出して魅せなさいよ」

「…ハ、ハイ…」

もう恥も外聞も無かった…すると、

「エー！ナニソレ～！すご～い…手の動きがちょ～早過ぎなんですけど～」

これがクライマックスだとでも言わんばかりに、山田の手の動きが更に脱兎の如く急激に加速してイク。

「プププッ、やっぱ最期イク間際の男っていうのは、誰でもこうやって猿みたいに激しく扱きまくるってことなんだって～」

「…」

理性を失い、本能の赴くままに無我夢中で掻き出すその姿は、たしかに人間の男というよりかは、動物のオスそのものといっても過言ではない…

「アッ！ほら、先っぽのどこ見て！口がパクパクして開いてきたんだけど、そろそろなんじゃない？」

見るとたしかに、亀頭がはち切れんばかりに膨れ上がり、今にも大爆発を起こしそうな予兆を示していた。

(…イッ、イッちゃうのね…いよいよこの山田のチンポの先っぽから、ホンイキの真っ白い精液が飛び出てくるのね…)

その来たるべき男の最期の瞬間を見逃さないよう女子の視線が先端のヒクついた発射口に集中する…と、

「アツ…イツ、イツちやいます…やっ、山田ツ！…出します！」

山田自身による高らかな射精宣言が響き渡ったかと思いきや…

「アアツ…ウツ、ウウツ…」

上の口から情けない男の断末魔が漏れ、それとほぼ同時に下の口からも…

ードピユッー、ドピユツ…ピユツ…ー

身体がビクンツと縦に戦慄き、腰が大きく前に突き出されると、イチモツは激しく弾け飛んでイツた…

「キャアー！スゴ～イ！出てきたあー！」

真っ赤な亀頭の鈴口から噴出した真っ白な男の精液に、女子の口々から黄色い歓声が挙がる。

「エー！ヤダアー、何コレー！モノ凄い勢いじゃ～ん！」

解き放たれた男の絶頂の産物が、敷き詰められた新聞紙の上に次々と大粒の白い雨を降らしていった。

「ねえ、ちょっと～！どういうこと～？全然止まんないじゃ～ん！次から次と噴水みたいにどんどん出てくるんですけど～」

ここまでの長時間、溜まりに溜まった精液の勢いは留まるどころを知らず、二度三度と続けざまに迸り、辺り一面に大きな液溜まりを創り上げていく…

「あ～あ、こんな大量にドバドバ出すってことは、相当溜まってたっていう証拠じゃ～ん」

「ほら、見て～こんなところにまで撒き散らしちゃって…」

新聞紙に深く刻み込まれた無数の白い斑点がイチモツの先端から発射された精液の飛距離を明確に記し、その男の射精の勢いの良さをはっきりと物語ってくれていた。

「やっぱ、まだ一発目っていうだけあって、かなりネバつきがあって濃い目の精液なんじゃな～い？」

「…ってというか、コレって白いって言うよりか、濃過ぎて黄ばみがかがってるように見えるんだけど～」

ボタボタと打ち付けられるゲル状の塊のような粒音やその色が濃厚さをも教えてくれているのである。

「ププッ…ねえ、アンタたち～何そんな鳩が豆鉄砲を食ったような顔してんのよ～…どうだったの～？
こうやって間近でじっくり見た同い年の男のイキ様って言うのは？」

(…ス、スゴい…コ、コレが男の人の…)

(…ま、まさか…こんなカルピスの原液みたいに濃くてドロドロしたのが、これだけ何度も大量に噴き出してくるだなんて…)

その衝撃映像は、一年の女子の心の中に一生消えることのない強烈な印象として残ってしまったかもしれない…男というイキ物の射精の瞬間を目撃し、部室内は異様なほどの興奮の坩堝に化そうとしていた。

「…ハア、ハア…ハア…」

男の白い産物を全て吐き出し終えた山田が息を切らす。その一方、他の男子の息遣いも荒くなっていた。限界が近づいているのは明らかである。山田が真っ先に射精して魅せたことで少しは羞恥心が和らいだの
だろう…

「…あ、あの…すみません…ダメです…イ、イキそうなんですけど…」

すぐさま、別の男の手が拳がっている。

「フフツ…相変わらず、二番手もかなり早いわね…次は、佐藤か…」

まだ昂奮冷めやらぬ中、佐藤が射精要求を出していた。余韻に浸る間もなく、女子の視線が山田から一気に佐藤のイチモツへと移行する。

「さ～て、佐藤はどのくらい出しちゃうのかな～？」

「さっきの話だと昨日の夜に、シコって抜いたとか言ってたし、山田ほど大量には出ないんじゃない？」

女子がこの後、佐藤のイチモツから噴き上げられる精液の量を大胆予想している最中、

(エッ…い、今みたいな…モノ凄い射精シーンが…勃て続けに、佐藤の小さいオチンチンからも…)

限界ギリギリの強張りを片手に構えさせられた佐藤が、独りお勃ち台の上で今や遅しと発射の合図を待ち侘びている。

「フフツ…じゃあ、出してイイわよ。アンタも今の山田の射精に負けないくらい思いっきり飛ばして魅せなよ」

それはアイリの射精許可が下りて、間髪いれずのコトだった。

—…ピュツ…ドピュツ—

「…アツ…佐藤！…で、出ます！」

すでに我慢の限界に達してしまっていたのか、はたまた絶頂の恍惚感のあまり、頭の中から一瞬忘れ去られてしまったのか、佐藤の射精宣言よりも若干暴発気味に精液が飛び出てしっしてしまったのである。

「アァー！ねえ、今のって完全にフライングして先に出ちゃってたじゃ〜ん」

「そうだよ〜、それに『出します』じゃなくて、『出ます』とかイッてたし〜」

周りからブーブーと非難の声が浴びせかけられた。

「プププツ…あ〜あ、さすがに今の先走った出汁方は、一発目として数えられないんじゃない？」

(…そ、そんなあ…)

射精の衝動を途中で止めることもできず、こうしている今も尚、精液をビュービュー飛ばし続けながら、自らが犯してしまった失態に、不安げな表情で女子の表情を伺っている。

「う〜ん…まあ、そうだったかもしれないけど、勢いは申し分なかったし、量も思ってた以上に結構出るから、今回は大目に見てあげてもいいんじゃない？」

「まあ…たしかにこうやって新聞紙に飛び散ってるポイントを見れば、山田のに比べて飛距離は出てるよねえ〜」

山田よりも若干遠くまで飛び散った佐藤の白い刻印が自分の身をなんとか助けた。部長である綾子のその寛容な鶴の一声で佐藤はようやくホッと安堵の表情を浮かべる。それとは逆にその他の男たちからは焦りの色が伺えた。そう…一刻も早くイカなければ、この後に恐ろしい罰ゲームが待ち受けているのである。

「…あ、あの…すみません…コツチももう…」

そうこうしているうちにも、早くも別の男の手が拳がっていた。最初は躊躇っていた男たちもここからは我先にと一斉に手が拳がり始め、今回は同時に二人の射精要求が出されている。

「う～ん…今の手の挙がるタイミングは、タッチの差で田中の方が先だったんじゃない？」

「フフツ…じゃあ、三番手は田中よ！最初にも行っておいたけど、射精して魅せる時は一人ずつ順番なんだから、加藤はイキそうになってても田中が全部出し切るまで、絶対出さずに、そこで待ってるのよ」

「…そ、そんなあ…」

一瞬遅れをとった加藤の手が退けられた。直前でオアズケを喰らった加藤はまるで捨てられた仔犬のように何とも切ない表情を浮かべながらチンチンを余儀なくされる…が、それを黙って見過ごしてくれるような心優しい女子はここには一人もいない。意地の悪い女子はここでも男たちを苦しめた。ほぼ半数の女子が田中ではなく、加藤の方に目を向ける。

「あれ～加藤、何してるの～？右手が全然動いてないんだけど～」

そう指摘するのは副部長の優樹菜だった。優樹菜の言う通り加藤の右手は完全に止まっている。それは当然、今ここで暴発してしまわないための適切な措置なのだが…

「そうやって、ただ黙って突っ勃って見てないで、順番を待ってる間もずっと手を動かし続けてなきゃイケないルールなんだけど～」

と、そのまま扱き続けることが強要されたのである。

「エッ！…で、でも…」

「でもって何よ！ルールだって言ってんじゃない！アンタ、まさか先輩の言うことに逆らうつもり？」

「…い、いえ…そんなつもりは…」

ここでも先輩の命令は絶対だった。優樹菜の剣幕と無理強いによって、一度完全に止まった加藤の右手が控え目にそろそろとイチモツを抜き出す。

「ちょっと～ねえ、それって私たちがバカにしてんの～？今までのペースと全然違うじゃ～ん！もっと素早く扱いてくれなきゃ全然話になんないんだけど～」

「…」

抗うことはできない。加藤は止むを得ず、言われるがままに右手のスピードを速めるしかなかった…

「アッ…アアッ…」

言うまでもなく、当然のことながらすぐさま沸々と射精感が込み上げてくる。

「そうそう…イイ感じになったじゃ～ん！ちゃんと田中が精液を完全に出し切るまでの間、ずっとそのままの調子で扱き続けながら、ガマンしてるのよ」

しかし、優樹菜はそう言っておきながらも、顔を歪める加藤を覗き込みニヤリと妖しい笑みを浮かべ、言葉を付け加えた。

「フフッ…でも、ちゃんと解ってるわよね…もし今、ガマンできなくなって、ソコから白い液がほんのチョロっとでも顔を出してきちゃったら…それはルール違反で許されないことだから…」

「…そ、そんなぁ…」

無理難題に加藤の苦悶の表情をみせる。

「ププッ、そんな辛そうな顔してどうしたの？もうイキそうになってんの～？」

「エー、まだ出しちゃダメだって、イッてんじゃ〜ん」

「ねえ、でも見てよ〜さっきから先っぽが凄いピクピク言ってるんだけど、コレってそろそろ限界ってことだよねえ〜」

「加藤はちゃんとガマンできるかな〜？それとも辛抱できずに、思わず白いのがドピュッって出てきちゃうのかな〜？」

周りの女子が愉しそうに加藤のイク末を占っている。加藤はどうしていいか解らなかった。

「ほら〜右手がどんどん遅くなってきてんじゃ〜ん！手を抜いてないで、もっと素速く扱いてないと〜」

優樹菜たちの言葉責めによって錯乱状態となった加藤に、一度治まりかけた射精の兆しが猛然と込み上げてくる。

（アッ、アアッ…そんな…ダ、ダメだ…こ、このままじゃガマンなんて…）

それは加藤がすぐそこまで迫りくる自分の限界を悟った時だった…

「…た、田中！…出します！」

頭上の田中からようやく高らかな射精宣言が聞こえてくる。

「アッ…アアッ…」

「キャア〜！すご〜い、ナニコレー！水鉄砲みたいな出方なんだけど〜」

切羽詰まった表情の加藤とは対照的に、田中は隣りで恍惚の表情を浮かべていた。何のしがらみもなく、気持ち良さそうに発射された大量の精液が綺麗な放物線を描き、新聞紙の上にボタボタと無数の白い斑点を

描いていく。

「ちょっと～！田中の奴、こんなところまで飛ばして勢い良過ぎだって～」

「やっぱこんだけバカデカイチンコだと、出てくる精液の量もハンパないんじゃない？」

そんな自分の真上で他の男が豪快に射精する光景を目の当たりにし、加藤の心は音を立てて崩壊した。田中に遅れることほんの数秒

「アアッ…ダ、ダメです…で、出ちゃいます…ウツ、ウウツ…」

情けない呻き声と共に辛棒できなかつた加藤のイチモツからも…

ードピュツ、ピュツ…ドピュツ—

「アァー！ほら、みんな見てー！加藤のヤツもガマンできずに、イツちやったんだけど～」

田中に負けじと、こちらからも大量の精液が飛び出してしまっている。

「あ～あ、まだ出してイイって言ってないのに、何出しちゃってんの～」

「キャツハハツ、やっぱ加藤もガマンできずに出しちゃったんだあ～」

何のしがらみもなく絶頂へと達した田中を疎みながら、加藤は射精宣言することなく、白濁液をドバドバと漏らしていた。

「ねえ、ちょっとー加藤！コレって、一体どういうこと？出しちゃダメだと言っておいたじゃん！」

勝手に暴発射精してしまった加藤のもとに鬼の形相のアイリが詰め寄ってくる。新聞紙の上にこれでもかと撒き散らされた加藤の白い残骸を指差し、捲し立てた。

「す、すみません！…ガ、ガマンができなかったんです…許して下さい！」

加藤は慌ててアイリの足許に跪き、土下座までして必死に謝った。

「あ～あ、さすがにこれは許されないコトでしょ～」

そう言ってけしかけるのは、加藤を射精へと追い込んだ優樹菜張本人である。

「フフツ…まあ、いいんじゃない…今回はアンタのその土下座に免じて、許してあげなよ」

「エッ！綾子ったら、そんな簡単に許しちゃっていいの？ちょっと甘くな～い？」

「だって、こうやって男子が途中で暴発して出しちゃうっていうのは、絶対毎年一人か二人いることなんだし、目を瞑ってあげなきゃ時間ばかり掛かっちゃうんじゃない…コッチのお愉しみはまだこの先なんだから、ソコまではしっかり勃たせておいてもらわないと…」

「フフツ…たしかに、そう言われてみれば、そうかも～」

今日はたまたま機嫌が良い日だったのか、綾子が寛容であってくれたおかげで加藤は難を逃れる…だが、男たちは更にこの後に待ち受けるとんでもない性裁を想像し、ますます恐怖を募らせていくのだった。

(7)

山田、佐藤、田中…そして、加藤と勃て続けに4人が射精してしまったことで、部室内は男クサイ異臭が充満していた。新聞紙一面に飛び散った無数の白い塊から、鼻にツンとくるイカクサイ臭いがムンムンと漂ってくる…が、その芳しい男臭は女子の本能的な部分に激しく訴えかけ、身体を熱く火照らせていた…

(…こ、こんなに次から次へとイキつく間もなく、ビックリするくらい大量の…せ、精液がビュービュー連発で飛び出してくるのを何度も魅せられたら…)

(エッ、何?…まっ、待って!…私ったら、まさか…こ、こんなに…)

ネチヨネチヨとした嫌な湿り気が股間から内腿に渡って広範囲に感じられる。白い液をより遠くへ飛ばす為、目の前で必死にイチモツを掻き勃てている男子の憐れなオナニー姿を、女子が瞳をジュンと潤ませながら、下半身を気持ち悪そうにモジモジとくねらせていた。

「ほら～アンタ達も早いとこ出して魅せないと、後でとんでもないことを遣らされる目に遭うわよ～」

周りの先輩女子たちの恐ろしい声援が男子に発破を掛ける。残されたモノは隣りの強張りの状態を気にしながら、一刻も早く抜け出せるようただひたすら利き手をシコシコと上下に素早く動かし続け、快感と苦悶による複雑な表情を浮かべていた…

「…あ、あの…すいません…」

「何よ～そんな腰の引けたみともない恰好しながら情けない顔しちゃってえ～」

「…も、もうダメです…出ちやいそうなんですけど…」

「プププッ…もう出ちゃうって、アンタたちホントに全員早過ぎなんだけどー」

「フフツ…どうせガマンしろって言ったって、ムリなんでしょ…イイわよ…だったら、後ろの方の一年の女子にもよ〜く見えるようにチンポを思いっきり前に突き出して、タツプリと出して魅せなよ」

「…は、はい…解りました…だ、出します…アツ…アアアツ！…ウツ…ウウツ…」

—ヴピユツ—…ドピユドピユツ—

「キャァー！ナニー！コイツ、超勢い良過ぎだつてー！こんなところにまで飛ばしちゃってんじゃ〜ん！」

(エツ！…スツ、スゴい…また、こんなに…)

情けない男の断末魔とともに、独りまた一人と間発入れることなく、白濁した飛沫がコレでもかと空中に撒き散らされてイク。

「ねえ、見てよ〜まだ止まらずに、ドクドクイツて尚も先っぽから残り汁が出続けてるんだけど〜！」

「エー！ちょっと〜いくらなんでも一回の射精で出す量が多過ぎだつてー！」

三度、四度と鈴口から噴出される精液の量とその分泌回数が増えてイク度に、女子たちの黄色い歓声が挙がり、好奇の目が向けられた。

(…お、男の人がイツちゃった時っていうのは、こんなふうにな…オ、オチンチンの先っぽから白いオシッコみたいなベトベトした粘液が…何回にも分けて…)

(ウフフツ…ほら、アツチの加藤のなんか、ついさっきまではあんなにギンギンで元気イッパイだったっていうのに、射精して一回全部出し切っちゃった途端、頭がどンドン項垂れてきて、アツという間に小さく萎んじやっただけ…)

(アー、ホントだぁ〜…何かアレって芋虫みた〜い)

「…」

射精後のイチモツが急激にみすばらしい姿になっていく過程までもが余すところなく観察され、笑いモノにされてしまうのである。思春期という年頃の男にとって、これほど恥辱的で惨めに感じることもないだろう…こうして、当初の女子の読み通り5分と持たないうちに、男たちによるセイキの一戦は早くも終焉を迎えようとしていた。

「フフツ…アンタ達、もう十分だわ…そこまでよ！今すぐシコシコするのを止めて、チンポから手を離しなさい！」

…と、イキ遅れた男二人の最期の一騎射ちとなった段階で、何故か突然バツサリと打ち切られる。

「今の結果、罰ゲームは高橋と山下の二人に決定で〜す！」

「エツ！…そ、そんな…待って下さい！…ぼっ、罰ゲームって、一人だけなんじゃ…」

「ププツ…誰が一人だけだなんて言ったのよ〜それはアンタたちが勝手に勘違いしてただけじゃ〜ん」

お互い一人だけだと思い込んでいた高橋と山下にとって、それは予想外の展開だった…

「まあ、山下の場合は暴発して先に一回出ちゃってるから解るけど、高橋がここまでイケないのは、さすがに遅漏だっ〜」

「やっば早漏の場合は笑えるし、とりあえずもう一発チャレンジしようって話になるからいいけど、遅漏の場合はただ長いつてだけで1ミリも笑えないもんねえ〜」

「…」

これが世の大半の女たちが思うところなのだろうか？…どちらかといえば、遅漏よりも、勃て続けに連発できる早漏の方がまだ幾らかマシという話なのかもしれない…

「残念だけど、射精できなかつたアンタたちにはこの後、女子の為に身体を張ってもらうことになるから…」

「…か、身体を張るっていうのは…一体ナニを…？」

「別に大して難しいことじゃないわよ…ただ単に、男同士の真剣勝負を魅せてもらうってだけだから」

「…し、真剣勝負って…」

「ええ…悪いんだけど、二人には女子のみんながもっと自分の性欲を抑えられなくなるくらいたまらなく昂奮して、頭と身体が完全におかしくなってイッちゃうように、男同士一対一でお互いのチンポを扱き合って、決着をつけてもらうから」

「…オッ！男同士でって…そ、そんな…」

聞かされたそのあまり内容に高橋と山下の顔から血の気が引き、一瞬で青ざめていく。

「フフッ、そう…要するにアンタたちは今日からお友達じゃなくて、おホモだちになっちゃうってことなの…その気の全くない二人がホモり合って最期、男が男の手で無理矢理イカせられるっていうアブノーマルなシチュエーションをオカズにして、一年の女子がオナってイクことになるから」

「なっ！…まっ、待って下さい！…そ、それって…女子の方も…」

遅れて付け加えられた内容に男二人だけではなく、一年の女子までもが全員青ざめさせられた。

「当然でしょ…男子がこうやってチンポから精液を飛ばす所までナニもかも全部曝け出して魅せてくれたのに、女子がこのままナニもしないでイカずに終わっちゃったら、どう考えたって不公平だし、身体的にだって欲求不満になっちゃうじゃ～ん」

「…」

たしかにそう言われては、何も言葉が見つからない…

「それでは、男子のオナニーに引き続き、今度は女子がオナニーしてイキたいと思いま～す」

アイリのその掛け声に、下を俯いていた男子が一斉に顔とイチモツを跳ね上げ、逆に女子は大きく項垂れた。結局、男子同様下半身まで全てを披露しなければいけないのだから…というか、オナニーして最期あられもない顔をしながらイキ果ててしまう最も恥ずべき姿まで…

「…そ、そんなこと…で、できません…」

今にも掠れてしまいそうな声だったが、それは一年の女子の中でもリーダー的な存在のエリカだった。

「エッ、何？…まさか、アンタ先輩に口答えする気？」

アイリが鋭い睨みをきかせ、それを許しはしない…

「…だ、だって…オ、オナニーだなんて…」

「エ～！何できないとか言ってんの～？アンタたちだってさっきほとんどがオナニーしてるって、きちんと認めてたんだし…だったら、ソレを男子がシタみたいココで遣って魅せればいいだけのことじゃ～ん」

「…」

「…っていうか、今までさんざん同い年の男子が一人ひとり射精してイクのを見てニヤニヤ楽しんでたくせに、女子だけナニも遣らずに逃げるっていうのは、さすがにズルいんじゃないの〜？」

「…そ、それは…」

そうなのだ。このようにアイリたちは先に男子がオナニーしてみっともない顔をしながら、不様にイッてしまうまでの過程を余すところなく魅せつけることで女子が断ることのできない状況をまんまと創り上げているのである。

「…」

策略通り、その後エリカの言葉は続かなかった…

「それに、そんな出来ないだとか言ってるけど、ソレって絶対ウソだよねえ？アンタたちだって、男子が一人ずつ順番に射精してイツちやうとこ見ながら、ホントはモノ凄い昂奮しちやあって、正直この後、家に帰って独りになった途端、速攻でオナるつもりだったんじゃないの〜？」

「…そ、そんなことは…」

「エッ、何？そんなことは何よ〜…まさか、昂奮してなかったとでも言うつもりじゃないでしょうねえ？」

「…」

「どうしたの〜？黙ってないで、文句があるんだったら何とか言ってみなさいよ〜」

「…べ、別に私は昂奮してなんか…」

「フフツ、へえー！そうなんだあ〜…イイわよ、私たちだってそこまで鬼じゃないし…もし、アンタたちがホントに昂奮してなかったというなら、オナってくれなくても…」

「エッ…ホ、ホントにしなくても…」

「ええ…ウソなんか言わないわ…ただし、きちんと証拠は魅せてもらうわよ」

「…しよ、証拠って…」

エリカが不安げな表情を浮かべながら問い質す。

「そんなのいちいち聞かなくたって解り切ったことじゃない…確かめてあげるから、スカートを捲り上げて、アンタが今穿いてるパンツがどんな状態になってるか魅せてみなよ」

「なっ…！」

エリカだけに限らず、この場にいる女子全員が動揺を隠せなかった…チラチラと隣同士気まずそうに顔を見合わせ、俯きがちになっていく。

「ほら、どうしたの～？別に、男子みたいに今すぐソコでパンツも全部脱いでマンコの割れ目を拵げて見せなって言ってる訳じゃないんだし、それに比べたらパンツを魅せるくらい簡単なことだと思うんだけど～」

「アンタが言ったように、ホントに興奮してなかったんだったら、コレっぼっちも濡れてるはずがないもんねえ～」

アイリたちが不敵な笑みを浮かべ、エリカを窮地へと追い詰めた。

「そのかわり、解ってると思うけど、私たちがチェックして、アンタのパンツがどう見ても明らかにイヤらしいマン汁でグチョグチョに濡れちゃってたら、その時はウソをついた罰としてイクまでしっかりマジオナしてもらうから…それだったらナニも文句ないわよねえ～」

「…そ、そんな…」

「ほら、どうしたの～？興奮してなかったっていうなら、何の汚れも付いてない清廉潔白な証拠を私たちに魅せてみなよ～」

その厳しい追及に、エリカは固まったまま、全く動けずにいる…わざわざ意識をせずとも、股間からはヒンヤリとした嫌な湿り気がヒシヒシと伝わってきていた。

「ねえ、そうやって黙ったまんま魅せれないってことは、アンタも自分で今、完全に濡れてるっていう自覚があるってことなんでしょ～？だったら、いつまでも意地張ってないで、素直にパンツも全部脱いでオナって魅せなって～」

「…」

再三の口煩い指示にもエリカは一向に応じるような気配がない…

「…イイわ…そんなに聞き分けがないっていうなら、特別に先輩がお手本を魅せてあげるわよ…ねえ、久美！一年が全然言うこと聞かないみたいだから、教育がなっていない罰として二年のアンタが先に捲って魅せてみな！」

「エッ！…わ、私が…ですか？」

突然の部長命令に、久美の口から今にも泣き出してしまいそんな悲痛な声が挙がる。

「何よ！まさか、嫌だとも言うつもりじゃないでしょうね？アンタ、先輩に逆らったら、どういう目に遭うか忘れたんだったら、もう一度しっかり思い出させてあげるけど？」

「…イ、イエ…それだけは…わ、解りました」

脅し文句が久美を震え上がらせた。やはり上級生の命令に逆らえば、とんでもなく恐ろしい目に遭うとい

うことに違いない…

(…まっ、待って…久美先輩ったら、ホントに…)

男女問わず、全部員の注目を一身に集める中、久美がスカートの裾に手を掛けたかと思うと、まるで緞帳が上がっていくかのようにゆっくりとソレを、捲りあげていく…こうして、隠されていた久美の陰部が垣間見えると…

(なっ！…ま、まさか…く、久美先輩も…こんなになるまで…)

「あ～あ、久美～アンタもすでに結構イイ感じに濡らしちゃってんじゃ～ん」

「…」

披露された久美の淡い水色のショーツの中央部には、十円玉大の淫靡な輪ジミが色濃く描かれていた。

「ねえ、久美～コレって、どういうことなの～？黙ってないで、ちゃんと男子にもよ～く解るように詳しく説明してくれないと～」

たぶん、このように当人に恥ずかしい言葉を言わせて辱めるのも毎年恒例の仕打ちなのだろう…

「…は、はい…あ、あの…コレは…男子が…せ、センズリして…ち、チンポから…せ、精液が出てくるのを見てるうちに、昂奮してきてしまっ…そうしたら、こうやって…オ、オマンコが少し濡れてきてしまいました…」

「ププッ…エ～！それって、全然少しとかの濡れ方じゃないじゃないんですけど～！久美は去年一回見て全部解ってることなんだから、もっと感情を抑えて濡らさないようにしてくれないと～」

「…す、すいません」

淫語と自身の濡れ具合を部員全員の前で自白させられ、久美は頭の先から足つま先まで全身真っ赤だった。

「ほら、エリカ～こうやって久美先輩がお手本を見せてくれたんだし、次はアンタの番なんじゃないの～？」

自分より一学年上の先輩が犠牲となり、矢面に立ってしまっていては、もう逃れることはできないだろう…ゾクッと背筋に悪寒が走り、恐る恐る視線を向けてみると、後ろから久美が鬼の形相で睨みつけている。

「アンタ、これ以上コッチに何かあったら、どうなるかわかってるんでしょうね！ さっさとやんなさいよ！」

「…わ、解りました…」

観念したのか、薄い望みを胸に、エリカがオズオズとスカートを下していった…こうして覆い隠されていたエリカのショーツの核心部が垣間見えると…

「プププッ…へえー、まさかこんなヒドい状態にしておいて昂奮してないとか言っちゃってたんだあ～」先輩女子たちのバカにしたような高笑いが部室内に響き渡る。

「アレ～、ソコにどう見てもかなり大き目のシミができあがっちゃってるみたいなんですけど～」

「…」

姿を現したエリカのショーツのクロッチ部には、本人の想いとは裏腹に久美以上の色濃い輪ジミがデカデカと描かれていた…

「ねえ、エリカ～ソレって、どっからどう見ても完全に濡れちゃってますけど～」

「…イ、イエ…コ、コレは…ち、違います…」

完全にクロという証拠が出ているにも関わらず、否定の言葉が口を伝う。自分でもそのことを認めたくなかったのかもしれない…

「はあ？アンタ、何が違うっていうのよ！こんなお漏らししたみたいなバカデカイシミを造っておいて認めないつもり？じゃあ、このシミは何だって言うのよ！」

「…」

「フンッ！もうイイ加減面倒だわ…そうやっていつまでも往生際悪く、ふざけたこと言うんだったら、その邪魔なパンツも脱がして丸見えの状態にしちゃってよ！」

「エッ！」

「エッじゃないんだって！スツポンポンにして、直接マンコの割れ目を拡げてみれば、はっきりすることじゃない！」

アイリがいきなりツカツカとにじり寄ってきたかと思うと、モノ凄いスピードでパンツに手が伸びてくる。

「アッ…やっ、やめて下さい！」

「ちょっと！暴れないで少しじっとしてなって！」

「イツ、イヤッ！…そ、そんな…ダメ！…ヤッ、ヤメテッ！」

激しく身を振らせ、必死に抵抗したってかなうはずが無い…

「ほら、もう観念してアンタのイヤらしい濡れ濡れのオマンコを男子のみんなに見てもらいなって」

先程の仕返しとばかりに久美をはじめとする周りの先輩たちにバタつく手足を抑え込まれ…結果、ショーツが無理矢理剥ぎ取られることになってしまう…ショーツがアイリの手落ち、

「へえ～、コレを濡れてないとか言っちゃうんだあ～」

ショーツを裏返しにされ、割れ目が直に接触していたクロッチ部分が日の目を浴びている。そこは最もデリケートな部分であり、女が人に一番見られたくない場所と言っても過言ではない…だが、

「ほら、鈴木どう？…エリカのココの処見でどう思う～？」

…と、先程好きだと自白させられた男子の前に、コレ見よがしにかざされている。

「エッ！…まっ、待って！や、やめて！お願いッ！鈴木、見ないで！」

「…」

エリカの悲痛な声も虚しく、目と鼻の先に突き付けられた女のナマナマしい部分に、鈴木は完全に言葉を失っていた…

(…ま、まさか…こ、こんなヒドイことに…)

魅せられたクロッチの裏側は、若干黄ばみがあり、その上に白く泡立ち、ネバついた大量のマン汁が驚くほどベツトリとこびり付いている。

「鈴木、どうなの？どうなってるかエリカにはっきり言ってやんなよお～」

「…ハ、ハイ…あ、あの…コレは…何て言うか…も、ものスゴく…濡れてます…」

そこからプ〜ンと立ち込めてくるメス特有の酸味のキツイ強烈な臭いが鈴木を混乱させたのか、口から嘘偽りのないありのままのコトが零れた…

「ププツ、だよねえ〜…っていうか、コレって男が引くくらいグチヨグチヨに濡れちゃってるもんねえ〜」

「…」

「あ〜あ…大好きな鈴木にもものスゴい濡れてるって言われちゃったら、どうしようもないじゃ〜ん」

「フフツ…これでナニも文句ないわよね…この後、エリカにはイクまでしっかりマジオナしてもらうから…イイわね」

ショーツを褌り取られ、全裸にさせられたエリカが股間を手で覆い隠しながら、肩を震わせ、その辱めに耐えていた…

(8)

「ほら、アンタたちも全員確かめてあげるから、スカートを下ろしてパンツを魅せてみなよ」

こうして否応無く、端から一人ずつ順にスカートが剥ぎ取られ、パンツが今どんな状態になっているかを先輩たちの厳しい目で事細かくチェックされていく。

「あれ～どういふこと？ 茜のココにも、しっかり大きなシミができあがっちゃってますけど～」

「ねえ、これって茜も完全に濡れちゃってるよねえ～」

「…ハ、ハイ…濡れてます…」

「ププツ…茜も何気ない顔してたくせに、鈴木がセンサーして精液飛ばすところ見て、こんなに染み出てくるまで濡らしちゃってたんだあ～」

「…す、すいません…」

もうエリカのように口答えする女子はいなかった…逆らえば、逆らうだけヒドイ目に合うのは横目に見えるのである。

「あ～あ…アンタたち昂奮してないんじゃないかなかったっけ～？」

チェックの結果、濡れていない女子は誰一人としていなかった…一年全員のショーツのクロッチ部には、一目見ただけでハッキリ解る程の多量の淫靡なマン汁が確認されたのである。

「…っていうか、何人かのなんて濡らし過ぎて、毛が透けてるところか、マン筋までクッキリ浮かび上

がってるんですけど～」

「…」

あられもない股間の状態を面白おかしく罵られ、女子たちはその場に居ても立っても居られないといった感じにモジモジと脚をくねらせた。

「エリカもこんだけグチョグチョに濡らしといて、よく昂奮してないとか言えたよねえ～」

(…そ、そんなこと言われたって…だ、男子がこんなツチノコみたいなモノをシコシコ扱いて、白い毒液みたいなのをドピュドピュ吐き出すところを何度も見せられたら、普通女なら誰だって…)

先に男子のナマナマしいオナニーをコレでもかという程さんざん魅せつけられ、勢い良く大量射精するシーンまで余すところなく目撃しているのである。むしろこの状況で興奮せず、少しも濡れていない女の方が、ある意味正常ではないのかもしれない…先輩の女子たちだって澄ました顔でこうしてバカにしてはいるもののホントは…

「こうやって全員どっからどう見ても完全に濡れちゃってたんだし、これで誰も文句ないわよねえ？」

もう誰の異論の声も拳がりはしない…

「…それじゃあ、予定通り女子も全員揃ってオナニーしてもらおうから…そこでパンツも脱いでオマンコを出しなさい！」

「…」

エリカがすでに無理やり筆り取られ、全裸になっているせいもあるのだろう…一年の女子もようやく観念したのか、一人の女子がクルリと後ろ向きになり、股間に残されている最後の薄い一枚を引き下げた…と、そこから肉付きのいい丸みを帯びた二つの桃がプリンと飛び出し、後ろの割れ目がお目見えする。その潔い姿に釣られたかのように、他の女子たちも渋々ながら、パンツをソロリソロリと脱ぎ捨てていった…

「クスクスッ…みんな思ってたより、結構可愛らしいケツしてんじゃ〜ん」

「ア〜！ほら、アソコのとこヤバくな〜い？今、美咲のパンツからマン汁が糸引いちやってたんだけど〜」

「エッ…そ、そんなこと…」

決して触れられたくは無い醜態部分を明るみにされ、美咲はあまりの羞恥心に思わずその場に蹲る…が、たしかにパンツを下ろす際、その濡れ具合を物語るよう股間から粘り気の強い白い糸がビロ〜ンと長く伸びていた。

「ププッ、アンタたち昂奮していないとか言っておきながら、どんだけ濡らしてんのよ〜」

このように先輩女子たちが黄色い声を挙げてキャツキャツと大はしゃぎする中、

「…す、すみません…」

申し訳なさそうな掠れた声が聞こえてくる。

「何よ？どうかしたって言うの？」

「…あ、あの…今日…せ、生理なんですけど…」

「はっ？セイリ？ふ〜ん、そうなんだあ…こんなタイミングの時に生理だなんて、アンタも運が悪いわね」

ここに30名近くの人数がいるのだから、こういった女子がいたって、何ら不思議ではない…女同士、こう涙ながらに訴えた女子の辛く切ない気持ちだって痛いほどよく解っているはずである…が、

「…でも、だから何？そんなの関係ないわ！ツベコベ言っていないでアンタもさっさと全部脱ぎなさいよ！」

「…そ、そんな…」

アイリたちは非情だった。生理だから…と言って特別扱いにしたりはしない。その女子も皆と全く同じくショーツを脱がされる破目になり…

(なっ、なあ…アソコのところに貼り付いて見えてるのって…)

(あっ、ああ…せ、生理の時の女子っていうのは、あんなふうに…)

股間の割れ目部分を全て覆い隠すようにピッタリと宛てがわれた純白のナプキンが、男子の脳裏に女子の生理現象を生々しく連想させた。

(おっ、おいッ！…今、中が血で赤くなってたの見たか？)

ペロリと剥がれ落ちてきたナプキンから垣間見えたドス黒い血の色が男たちに何とも言えない欲情を掻き立たせ、ザワザワと騒ぎ勃たせる。

(…そ、そんな食い入るように見なくたって…)

一糸纏わぬ同学年の女子の後姿に男たちの目は釘付けとなっていた。男子の時ように一人ずつ順番に見られないことが唯一の救いだっただろう…全員が脱ぎ終えるまでにほとんど時間はかからなかった…張りのあるプリっとした可愛いお尻が所狭しと並び、左右にユラユラと揺れている。

「ほら、そうやっていつまでも後ろばっか見てないで、前を向いて一番肝心な処をよく見せてみなよ～」

オズオズと振り返った女子たちは皆、両手を股間の前で固く結び、バツをつくっていた。両手だけでは隠しきれない縮れた陰毛が各々の所々からチラチラとはみ出している。

「ちょっと、アンタたち！男子がこうやって誰一人隠さずにチンコを丸出しにして見せてくれてんだから、女子の方だってちゃんと手を後ろに除けてしっかりオマンコの割れ目を見せてやんなって！」

アイリの怒号が女子の手をゆっくりと紐解かせた。そこからモジャモジャとした無数の黒い飾りがお目見えし、女子一人一人のいたいけな陰部が次々と明らかになっていく。

「へえー、アンタたちパンツはそれなりに可愛らしいのを穿いてるくせに、中身はこんなヒドいことになってたんだあ〜」

「…」

「ププツ…やっぱこうやって見てみると、全然お手入れしてないって感じだよねえ…ほとんど全員のマン毛が生えたい放題になってんじゃ〜ん」

そりゃ誰だって、まさか部活内でこんな形で見られることになるとは、思いもしなかつただろう…

「美咲〜アンタ、顔に似合わず、マン毛は思ってた以上に濃くて剛毛なんだねえ〜」

(…そ、そんなこと…)

一番のコンプレックスであることを笑いのネタにされ、美咲は顔を真っ赤して俯いた…

(…そ、そう言われてみれば…たしかに、他の奴らに比べて、美咲のアソコの毛の量がダントツで濃いような気が…)

(…まさか、美咲のマンコの毛が…あんなジャングルみたいにボーボーだったなんて…)

幼い見た目と、そのうっそうと覆い茂った濃い目の陰毛のギャップに、男たちはますます気持ちを昂ら

せる。

「逆にエリカのは気が強いくせに、パヤパヤっとなにか生えてなくて、割れ目の形までモロ判りなんだけど～」

「ププツ…エリカ～アンタって、結構ドテが高くてモリマンなんだねえ～」

(…モ、モリマンって…そんな言い方…)

「ねえ～そんな生えてるか生えてないか判らないくらい薄いんだったら、いっそのこと全部剃ってツルツルのパイパンにしてあげよっか～？その方が断然エロいし、男受けもイイと思うけど～」

「…イ、イエ…それだけは…」

先程の件もあり、とても冗談で言っているようには聞こえなかった…

(…エリカのが…あ、あんな子供みたいにほとんど生えてなくて、プツクリとしたモリマンだったなんて…)

そこに男子のような目に見えてはっきりと大ききの解るモノがぶら下がっている訳ではない…が、見るからにしっとりとした湿り気を帯びた陰毛と、恥丘がコンモリと盛り上がった女子の陰裂を目の当たりにし、男子は驚きと昂奮を隠せなかった。ついさっき一度抜いて落ち着きを取り戻したばかりのイチモツが早くもムクムクと膨らみ出し、今にも鎌首を持ち上げ始めようとしている。

「…それじゃあ、二年は座布団を用意して」

アイリの指示に二年の女子がテキパキと動き、ロッカーから座布団を持ち出すと、床に横一列に敷き詰められ、そこに体育座りするように促された。まあこれでも一応、痛くないように…という先輩たちなりの配慮的な心遣いはあるらしい…

「ねえ、今からオナニーして魅せなきゃイケないっていうのに、そうやって脚を閉じてちゃできないじゃ～ん…アンタたちもいい加減開き直って、股をコレでもかかってくらいガバツと大きく広げていつもオナニーしてる体勢になりなあってえ～」

もうココで遣って魅せる以外の選択肢は残されていないのだろう…アイリの放った言葉がまるで『開け、ゴマ!』の呪文のように固く閉ざされていた両脚を左右にゆっくりと広げていく。

—…ゴクリッ!—

男子は皆、大きな生唾を飲み込んだ。

(…スツ、スゲーツ!…コツ、コレが…)

目の前にとろ狭しと大きく広げられたいくつもの年頃の女性器の全貌に、男たちはまるで何かに取り憑かれたかのように微動だにできず、ジッと見入っている。

「フフツ…毎回思うことだけど、こっちから見ると凄い絵だよねえ～」

その光景はまさに壮観だった…パツクリと割られたいくつもの卑猥なオマンコが見事な美しいMの文字を描き出している。

「ほら～下ばっか俯いてないで、男子がチンコに被ってる皮を剥いて魅せてくれたように、アンタたちもちゃんと指で割れ目を開いて、中に隠れちゃってるマンコの穴を魅せてやりなあって～」

「…」

一年の女子たちは隣同士顔を見合わせ、戸惑いながらも、黙って指示に従った…ソロソロと指先を自身の割れ目へ伸ばしていったかと思うと…

—クパツ…—

厚ぼったい大陰唇が更に左右にパツクリと割られ、閉ざされていた女の秘密の花園が如実に映し出されている。

「ププツ…あ～あ、コレはモノ凄いことになっちゃってんじゃ～ん」

「やっぱ、想像してた以上に全員相当イイ感じに濡れちゃってるもんねえ～」

濡れていないモノは誰一人としていない。ソコは皆、『私のココを見て下さい』と言わんばかりに、キラキラと妖しく光り輝いていた。

「ほら、男子もよく見てみなよ～解る～？すでにクリが若干勃ってきて皮からチラッと顔を覗かせてるし、その下のチンコを挿れる穴がスゴいヒクヒクしてんだけど～」

(…じよ、女子の…オ、オマンコっていうのは…こんなふうで…)

こうして男子が凝視しているうちにも、拵げられたピンク色の部分の至る所からジワジワとマン汁が滲み出し、大粒の滴が創られていくのが見て取れる。

(…こ、こんな恥ずかしい処を…隅から隅まで全部見られたら、余計に…)

「アー！ちょっと、今の見た～？何人かのビラビラの中に溜まったマン汁が滝みたいに一気に垂れ流されてきたんだけど～」

(アアツ…そ、そんな…ダメっ…)

自身の恥部を目の前の男子に全て見られていることを意識したせいか、数名のオマンコからはこれまで大陰唇によってなんとか塞ぎ止められていた大量のマン汁がタラタラと滴り落ち、会陰から肛門を伝って、その下に敷いている座布団にまで垂れ流されていった。

(…コ、コイツら、俺たちのが勃ってガマン汁が滲み出ちやてたのをバカにしたように、ニヤニヤ笑っておきながら、こんなになるまで…)

「この濡れ具合だと、女子の方も全員いつでも準備万端みたいだし、とっとと始めてイッてもらおっか〜」

「フフツ、そうだねえ〜男子の時と違って、女子がオナる番の時は、全員イクまで若干手間取っちゃうもんねえ〜」

「…」

先輩連中の不気味な薄ら笑いに、一年の女子たちは更に大きな不安を募らせる。

「ああ…そういえば、ルールのことなんだけど、さっき男子がセンズリして射精して魅せた時と一緒に、女子の方も当然、独りひとりちゃんと最期イクまでオナり続けてもらうから…」

「エツ…」

女子が再び隣同士顔を見合わせ、戸惑った…

「先にイツとくけど、イケないだとか、イッたことがないだなんて、そんな甘いことは言わせないから」

アイリがすかさず釘を刺す。

(…イ、イクまでって…私、…)

戸惑うのは無理もない話かもしれない・・・男が皆、当たり前のことのように白い液体を飛ばし、イッて魅せたが、女の場合はなかなかそう簡単にはイカないだろう…まだ男を何も知らない処女やそれに毛の生えたような男性経験の浅いものがほとんどの一年の中には、オナニーとはいえ未だ女の絶頂を知らないものがいたっておかしくはないのだから…

「フフツ…アンタたち、間違ってもイッた振りしてやり過ぎそうなんて、そんなバカな考えは止めることことね」

「こっちだって同じ女なんだし、ホンキでイッたかどうかなんて、イクまでの喘ぎ方だとか最期のイキ様なんかを見てれば、すぐに解るんだから…」

「…」

たしかに、これだけたくさんの同性の目を誤魔化すというのは、さすがに無理がある話かもしれない…

「解ってると思うけど、もしウソがばれたり、最期までイケなかった人には、当然罰ゲームが待ってるから、手を抜かずにホンキでオナって、ここにいる誰が見ても、はっきり解るように、思いっきり喘ぎ声をあげながら激しくイッて魅せることね」

「…そ、そんな…」

「ププツ…心配しなくても、大丈夫だってえ～もし、どうしても独りでイケないって言う時には、ここにいる優しい先輩たちがお手伝いしてあげるし、コレなんかを使ったらイヤでもイッちやうから」

得意げな感じにそう言ったかと思いきや

—ブーン…ブーン…ウィーン…—

耳に規則的な機械音が響いてくる。

(エッ！…ま、まさか…この音って…)

手の中でブルブルと小刻みに激しく震えるそのモノを確認し、経験のある一年の女子は顔を引攀らせた。先輩女子たちがそれぞれ光沢のあるピンク色のオモチャやハンディータイプの電動マッサージ機を光らせ、ニヤニヤと妖しい笑みを浮かべている。

(…こ、こんなローターだとか電マなんかで…ア、アソコを…この先輩たちに容赦なく、一斉に責められたりなんかしたら…)

「フフツ…解ってもらえたわよね…あらかじめ先輩から忠告しておくことはそれだけよ…じゃあ、早速始めていきましょうか」

こうして一方的なルール説明が終わり、男子の射精大会に引き続いて、女子によるオナニー大会の火蓋が切って落とされたのだった…

性春のイタズラ ～制裁～

<http://p.booklog.jp/book/110743>

著者：望月 七海

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/n-akkazu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/110743>

電子書籍プラットフォーム：パブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト